

玉

録

イ 5
12
1



前曉晴翁撰  
松川伴山畫

全部五冊

# 菴餘學室雜錄

安政己未  
仲夏發行

五書房合梓

## 緒言

夫學做詩學做賦學詠和歌而

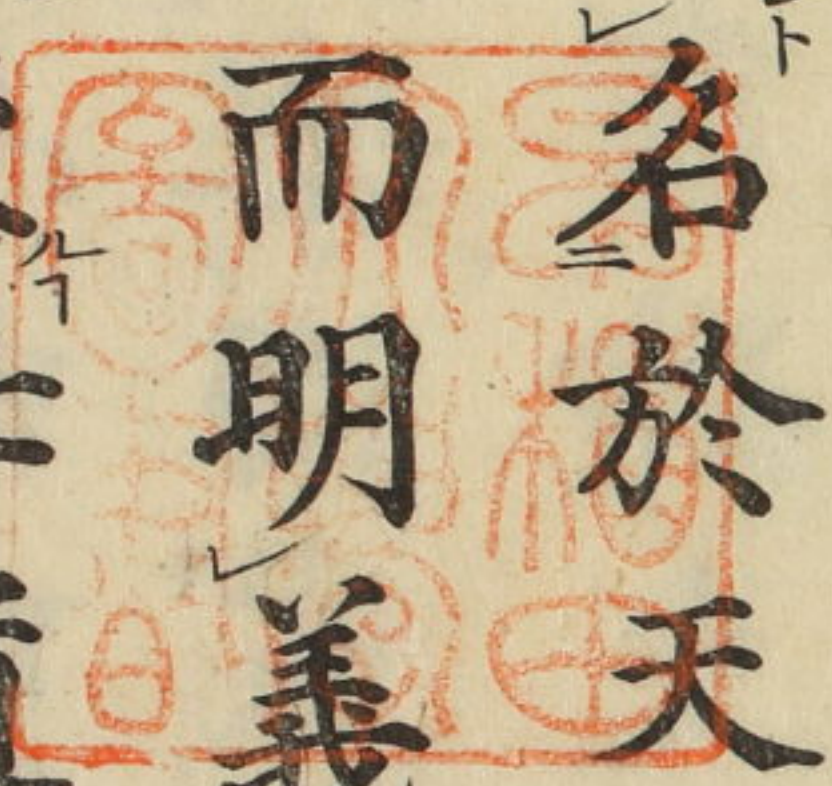
雖欲成名於天下非由此而識

字由此而明義由此而知聖賢

之道可至此道難焉先哲皆以

明經為最末文學也宜哉蓋此

5  
10  
12  
1  
卷

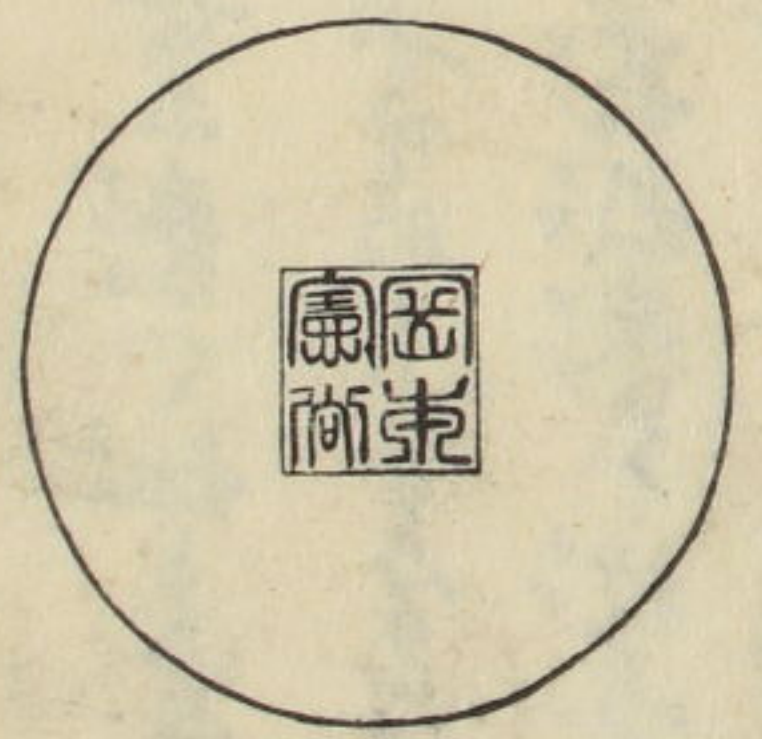


菴餘學室雜錄

書所載者吾邦所有之靈社  
場珍說奇詵所見問之及所口  
碑之傳舉而成編也實蒹葭堂  
之賜而書肆文魁堂之成功也  
閱者或誹謗此書而謂不足用  
歟然天下之豈是中有非非中

必有是無全是無全非也因是  
見是被叫風雅奇人者必讀了  
此書豈謂無于小補哉

竹藪





此書の多くは稿を著しおへぬ。されば本又竹を繕つて居る事なり。  
 又年曆の先後を記しあり。見客其杜撰を見許しおへぬ。此書  
 和幸問より後形々たる。二代兼葭堂の石居のたゞし存するは亦  
 中もむべし。由来予が撰集あるは家伝なり。あはれしむるは  
 あり。數回詳しおへぬ。書肆の許をばりし。後又姓名を古傳し  
 あり。

安政三年辰水五日

曉晴系誌

兼葭堂雜錄總目錄

○壹之卷

- 兼葭堂孔恭畧傳
- 橘酒稱贊文 清人筆
- 明心越鶴氅衣之圖
- 大雅堂印禱
- 大雅堂年譜
- 歌仙繪卷物
- 神具罇缶之圖
- 圓燈製式
- 同省像巽齋翁自記
- 賣茶翁省像 同画記
- 急焼之考 高芙蓉之傳
- 大雅堂印譜
- 大雅堂五十賀掌痕帖
- 春日神社据棚 同土器數種
- 衝重様塗
- 嵯峨釋迦佛

○小野篁朝臣像 空海筆

○景清事迹考

○二之卷

○安産草之説

○人像人參之圖

○阿波國異魚之圖

○竹筍化茯苓圖

○備前國之白玉

○諸國草筆之圖

○播磨國菽躑躅之楹

○弘法大師三衣囊

○景季菴梅之説

○黒百合之圖

○佛足石左右之説

○出羽國毒蟲之説

○飛騨國篠魚之圖 先記

○下総國異魚之圖

○甲斐國異馬之圖

○不見花之話

○輕粉原屋之名義

○李勇卿之藥匙

○和銅之説

○豪猪之説 并圖

○老人雜話之説

○空海之真蹟

○尾張國熱田白鳥之天

○浪華之出兒

○鳩桐之説

○三之卷

○水銀堀之説

○檢校勾當之説

○紀伊國異蛇之圖

○食火鷄之説 并圖

○育王山金渡之説

○芙蓉樓產物會品目

○東都常泉寺犬

○フラスコの字義

○兼葭堂所藏木猪之圖同記

○田樂法師之圖

○興福寺大鼎之圖

○越後國三田村之話同圖

○カハラヤナギの圖

○曲尾福平并放尻論

○水豹海獺之說并圖

○清涼寺牛華鬘

○明珍系圖并胃鉢之圖

○替古之字義

○綾蘭笠之圖 東大寺八幡宮藏

○春日神燈油注之圖

○賀茂虫籠之圖

○琢淳和尚秘傳藥法

○河豚之說

○初音耳四郎奇藝

○扶桑見聞私記辨偽

○明珍燦之說

○真盛豆末由

○狂画師耳鳥齋

○司馬芝叟之長話

○四之卷

○筑前國長命婦并螺由緒

○肥前國松浦惠日寺息鐘

○河内國梅川螢同大寶寺大佛

○五之卷

○徒然草鱧之說

○俊乘坊蓮實柄抄

○狩野探幽同尚信之燈爐

○四國路達磨男

○讀本淨瑠璃歌舞妓之差別

○摂津國岩崎八幡之話

○河内國慈眼寺楠公之書

○肥前國天草蒲鉾

○天竺蓮實之話

○備前國浦田ツ貝之圖

○佐久間信盛事迹

○猿觀物

- 群猿歌舞と望む話
- 谷風梶之助之真蹟
- 石炭堀之説同圖

- 正慶兼葭堂の死と悼む文
- 信濃國鹽市

總目錄終

兼葭堂雜錄卷之壹

浪華 前鐘成曉 晴翁撰

○ 兼葭堂名けいりやうだうの孔恭字こうきやうの世肅せしゆ又巽齋しゆんしやう木村氏きむらじ小字せうじ太吉たきち郎家名らうけなと坪井屋つがのやと号なづ以其初堀江いそは居住きゆうぢゆう一酒造いさづと業わざと一時庭中いちていぢゆう井いと穿う小不圖せうふと蘆根あしねと得える是則これすなはち浪速なみのの蘆あしあり是これより兼葭堂けいりやうだうと号なづは中頃船場なかつらふなば兵服町へいふくぢゆうに移住うつりぢゆうし世肅せしゆ幼少せうせうより物産ぶつさんの心こころとよせ珍奇ちんきの藥物やくぶつと初はつめ古器こき地圖ぢとう金石こんせきの碑文ひがひ古人こじんの書しよ画ゑ經史詩文きやうししよぶん諸の書籍しよせきと集あつ萬端まんたんの言ことばは原來げんらい博學はくがくの好このむとて能あたり志こころも榮耀えいごう放蕩はうたうの所ところ為なる實じつは無双むしやうの奇人きじんと今いま尚なほ家いへの自筆じひつの遺書いしよのりりて寫うつし其傳そのでんと詳つひなり且かつ省像しやうざうと縮圖しゆくとう一ひと所藏しよざうの木猪きのしゆと摸も寫もし并ならび記きを著あし雅談清話やだんせいごの一ひとつらる事こと爾しから





嗟乎是天下著名蕭葭木  
世肅之長耶世肅之後後  
世無斯人矣博物多識情  
恒淳厚人之稱讚不容于口  
天下潛之馬用短亦為余

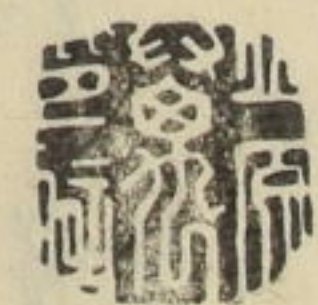
嘗西遊交恒綢繆世肅  
相識甚親不億今題其  
圖殊以乞余家人以量  
文非尋常之筆與其子永  
存交情

文化十一年甲戌七月

友人水戸翠軒主人

立原萬年

時年七十



徹山謹寫

巽齋翁遺筆

余幼年ヨリ生質軟弱ニテ保育ヲ專トス家君余ヲ憐テ草木花樹ヲ植ルヲ許ス  
 親族ニ蒸舗ノモノアリテ物産ノ学アルヲ語シ稻若水物産家中興松岡玄達字成章号恕  
 物産字繼アルヲ聞ケリ十三歳頃京師ニ松岡門人津島恒之進名久成字桂菴号彭水又  
 若水而興中高岡人津橋津島玄物産ニ委ヲ知リコ頃家君ノ京遊ニ從始テ津島先生ニ謁シ草  
 木ノ事ヲ問フ一會翌年余十五歳家君ノ喪ニアイ十六歳春余家母ニ從テ京ニ入  
 再津島氏ニ從学シ門人ト成ルヲ得タリ之ヨリ屢書ヲ通ジ物産ノ説ヲ聞キ津島氏モ  
 毎歳浪華ニ下リ本草ノ會アリ數出會ス宝曆四年甲戌津島氏客中ニ卒ス同社白齋  
 号旭山江戶田村元雄坂上登号藍平安直海元周名龍ト書ヲ通シ考索ヲ事トス近テコロ  
 備前人小野希博ニ從テ益名物ノ一ヲ究ム齋藤彦哲モ親ク交ルヲ得タリ  
 平安蘭山字以文

余五六歳頃ヨリ頗ル画事ヲ解我郷ノ大岡春ト將野流ノ画ニ名アリ因テ從テ学ブ春  
 卜嘗テ芥子園画本ニ倣イ門人画ヲ模寫シ明朝紫硯ト云彩色ノ繪本ヲ上ホス余ニテ見テ  
 始テ唐画ノ望アリ頃家君ノ友人家和州郡山柳澤權太夫郡山族始名下野名柳里恭字公美号  
 太夫ト云毎々客居ス因テ友人ニ托シ柳澤ノ画ヲ学ブ然トモ郡山ニ從学スルトエ紛本ヲ学  
 コレナリベリ十二歳頃長崎ノ僧鶴亭ト云人アリ浪華ニ客居ス長崎神代甚左門熱斐字淇瞻号  
 門人ナリ門人ナリ始テ幾内二南嶺流ノ私タルハ此人ニ始レリ名淨博字惠達号鶴亭今改名淨光  
 從テ花鳥ヲ学ビ京ニ入り池野秋平池戴成字無名号九霞号大雅堂平安人ニ從テ山水ヲ学ブ頃交友甚多  
 余十歳比親族兒玉氏元山忠藏片猷字孝秩号北海越後新写人字明霞先青人門人タルヲ以テ余ヲ引テ名字ヲ乞  
 片山余が名命シ名鵠字千里トス其後片山氏京ニ住ス余十八歳頃片山氏再浪華ニ下リ  
 立賣堀ニ住ス余從テ句讀ヲ受テ書六經史漢文選等ヲ讀リヲエタリ此後數々京ニ遊ビ片山氏同門

梅莊禪師 顯常字黃慈雲 相國寺二謁 岡太仲谷左冲伊藤物次清田文興江村傳

藏良野平助篠三弥林周助芥川湯軒龍彦次郎山服香川後藤之先輩二交ハ得

余嗜好ク專ラ奇書ニテリ名物多識ノ學其他書畫碑帖ノ余微カトイヘテ數年來

百費ヲ省キ收ル所書籍ニ不足ナシ過分ト云ビ其外收藏モ 本邦唐山金石碑本 本邦書畫

近代儒家文人詩文 唐人真蹟書畫 本邦諸國地圖 唐山蠻方地圖

草木金石珠玉虫魚介鳥獸 古錢古器物唐山器具 奇ヲ愛スニ非ス 蠻方異産

右ノ類アリトイヘテミナ考索ノ用トス他ノ艶飾ノ比ニアラズ

余平生茶ヲ好ム酒ヲ用イズ烹茶ハ京師賣茶翁親友タリ故ニ其烹法ヲ用ユ老翁

茶具余ガ家ニテリ末茶モ好デ喫ス彼茶礼ノ服ナシ

余幼年ヨリ絶テ知ザル古樂管絃猿樂俗謡 碁棋 諸勝負 妓館声色ノ遊總

其趣ヲエズ况少年ヨリ好事多端暇ナキ故ナリ勝ヲ好ザルハ余願養ノ意ナバナリ  
余弱冠ヨリ壯歲ノ比ニテ詩文ヲ精究ス應酬ノ多ニ因テ贈答ニ勞倦シ况才拙ニテ敏  
捷ナルハアタズ大ニ我胸懷ニ快ナラズ交誼ニ親疎アリ陣兄ヲ覺フ幸不才ニ托シ  
限テ作爲セズ偶興ノ到ニアバ佳句ヲ得バ快樂ノトス  
寶曆六年丙子余廿二歳森氏ヲ娶ル生質微弱ニシテ余ガ多病ヲ給スルニ堪ヘズ况十年ヲ  
歷トイヘ子ヲ産セズ故ニ家母甚シク愁明和二年乙酉家人ニ命シ妾山中氏ヲ娶  
給仕セシム妻森氏ト和好ニテ如忌ノナシ山中氏モ侍婢トナリ敢テ當タノニ非ス三年ヲ  
歷テ妻森氏明和五年戊子冬二女ヲ産ス 幼名ヤス安永三年 又明和八年辛卯一女子ヲ産ス  
初年ス五無恙 妾山中氏ヨリ妻ノ微質ヲ助ケ二女ヲ憐愛ス故ニ妻妾更和好ニ嫌惡ノナシ  
生長ス 家事ヲ勤儉シ小女ヲ養育シ數十年ノ閑居ニテ余ト小女妻妾ノ外一小婢ヲ仕テ家内五名

外ナレ故ニ未實多トイヘ凡礼節饗應ヲナスカカタレ  
 世上名本分士農工高アリトイヘ凡余微質多病ニテ已ニ堪ヘズ故ニ父母ノ遺業ヲ頗  
 文字ヲ知ル實ニ昇平ノ樂ナルベシ然レモ世上游惰放蕩ノ徒文字ニ托シ種々無頼漢多シ  
 余カ愧ル所ナリ因テ閑居ストイヘ凡名物の学ヲ精研シ不朽ノ微志アルコト  
 余家君ノ餘資ニ因テ毎歳受用スル所三十金ニ過ズ其他親友ノ相憐ヲ得ガ爲ニ少  
 文雅ニ耽ルヘテ得テ多事儉省ニアラスバ豈今日ノ業ヲ成ニヤ世人余ガ實ヲ知ラズ  
 豪家ノ徒ニ比ス余ガ本意ニアラス

右ハ一幅の袂褙トシ家ニ秘藏スル処ナリ

○蒹葭堂嘗テ蜜柑酒を醸シ一時舶来の清人又贈る彼國又ちのく大ニこれヲ賞  
 美ク賛詞を述テ報リ實又家の譽トシバ一其文を写シ次又出を

蒙

賜橘酒業已各人分沾嘗其味有江南之  
 福貞酒之風福貞酒用福橘女貞子二味  
 釀成但色渾而味濁故有不及又似乎浙  
 江之状元紅然状元紅無福橘之馨香又無  
 此橘酒之清潔維凉州葡萄酒稍有仿  
 佛其葡萄酒著名已久無人不知其美者  
 唐詩有葡萄酒美酒夜光杯之句但葡萄酒  
 酒雖清潔相似惜其味帶酸終不若今  
 之橘酒醇香清美真絕世無雙之佳釀

也亦等叨在愛下將來回棹之船倘蒙給  
賜帶往唐山諒無不人之爭羨也肅此謹  
覆並申謝悃

諸名另具

- 蘓州程赤城
- 山西張真遠
- 蘓州彭義來
- 杭州朱芬岩
- 全許容光
- 山西崔輝山

- 松江程劍南
- 蘓州馮聲遠
- 雲間顧舒長
- 山西王東山
- 福建黃永泰
- 廈門龔允謙
- 杭州汪竹里
- 湖州周王祿

貴茶翁、西原肥前國  
 蓮池の人也、姓、柴山氏、  
 元昭月海と号し、早年より  
 雍養して禪を學び、  
 芙蓉山と云ふ然れども  
 世の修行は本意の  
 あらざる後、寺に遊れ、  
 茶を賣り、飢を助く、  
 花よりあり、秋ハ紫ふ、  
 以て自ら、茶具、  
 序を設け、客と待、  
 名あり、世に聞、  
 松のよと、宝曆十三年、



未七月十六日没、  
 年八十九

賣茶翁画記

貴者君子之器也、富者豪家之器也、學行得貴之道也、勤儉得  
 富之道也、有人徒知富貴可悅、而終日營々、未得所望、學行勤  
 儉、有既修、雖未得富貴、猶有名利、從身有誠信、令然也、今於賣  
 茶翁有感、余友谷田氏應、葦葭翁之需、而寫此圖焉、  
 中無一  
 夷俗氣高尚之氣、動於紙上、雖筆墨之妙、亦骨相令然也、  
 余少年時、聞長老談、翁好茶、去今四十年、翁一匹夫、非有子孫、  
 門生傳其伎、而世人好之、至圖其像、誠信故也

寬政九年秋七月

江州日野外池義府記

鶴氅衣之圖 明僧心越所製 小野田東川所藏

寸法曲尺

袖口一尺八寸六分

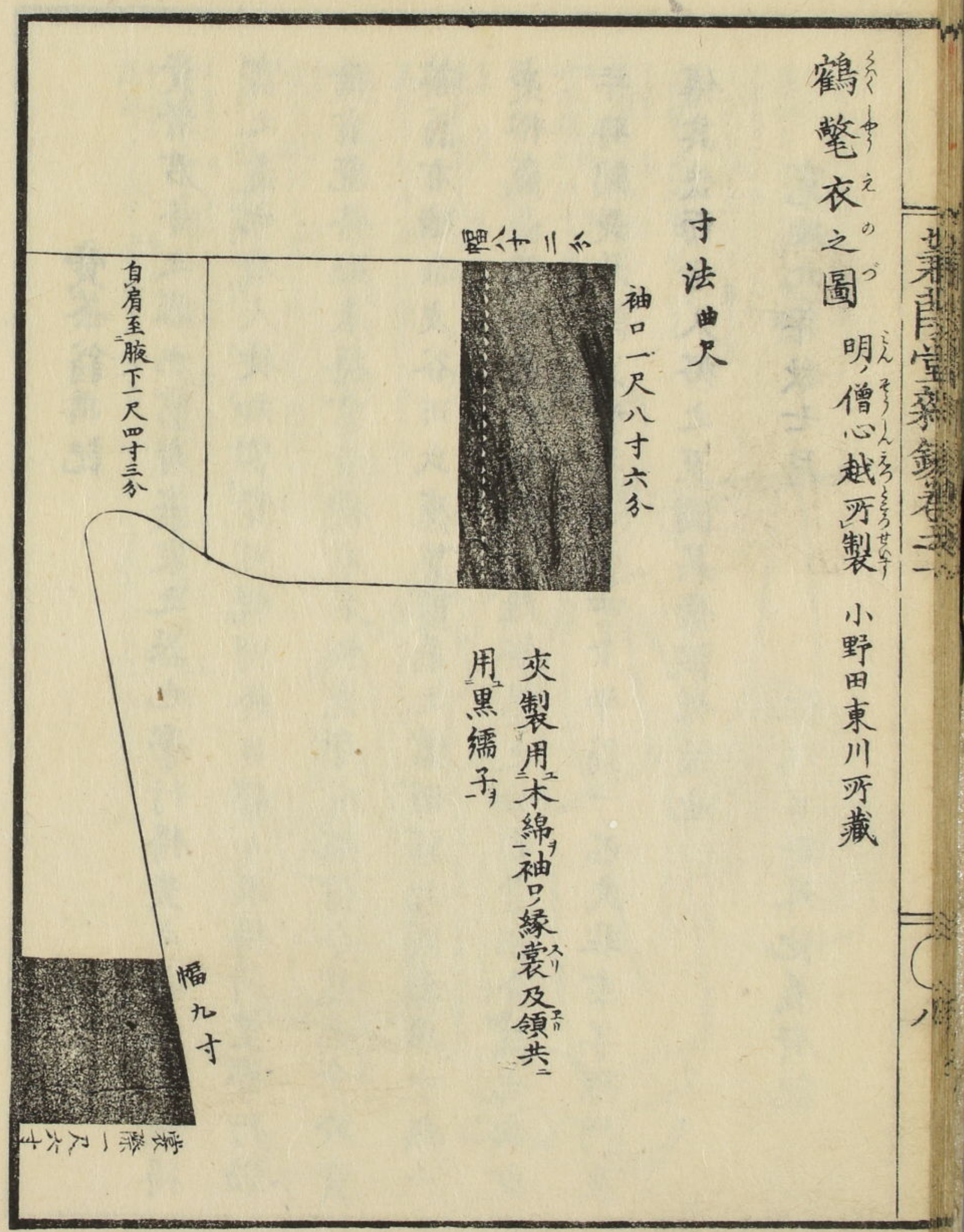
腰十寸五分

夾製用木綿袖口緣裳及領共  
用黑絹子

幅九寸

自肩至腋下尺四寸三分

裳際一尺六寸



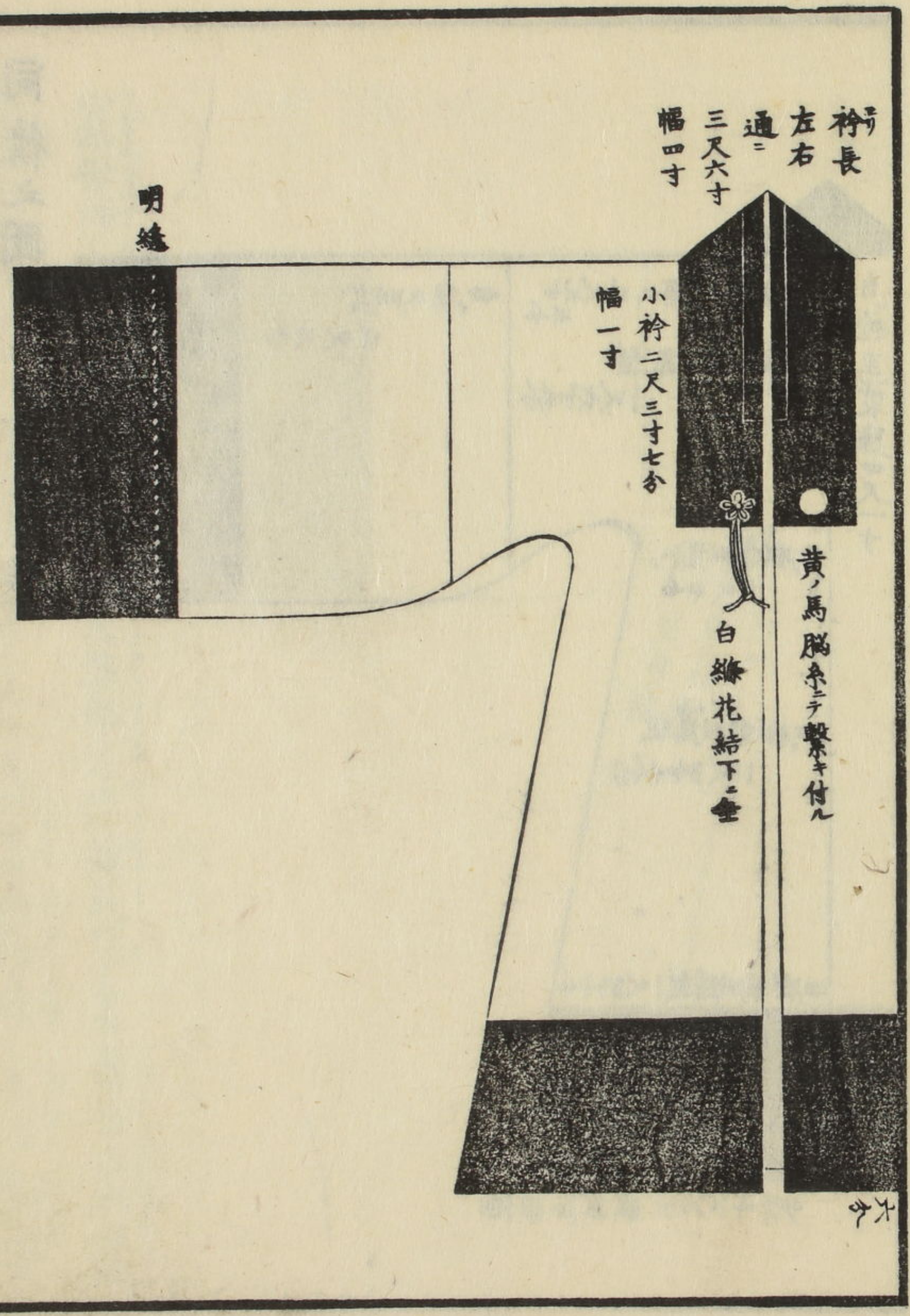
衿長  
左右  
通  
三尺六寸  
幅四寸

小衿二尺三寸七分  
幅一寸

黃馬腦系ヲ繫キ付ル  
白緋花結下ニ垂

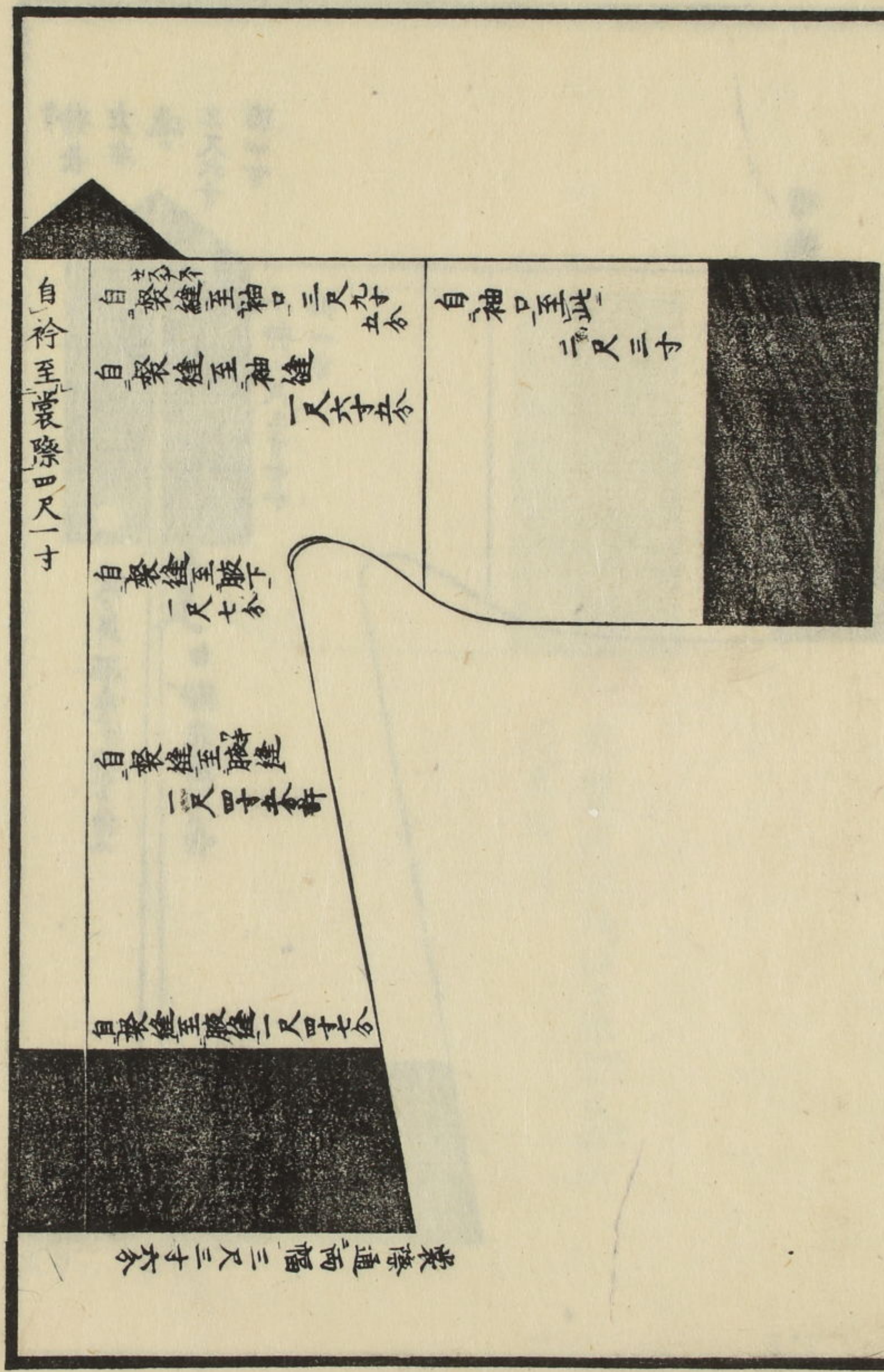
六分

明透

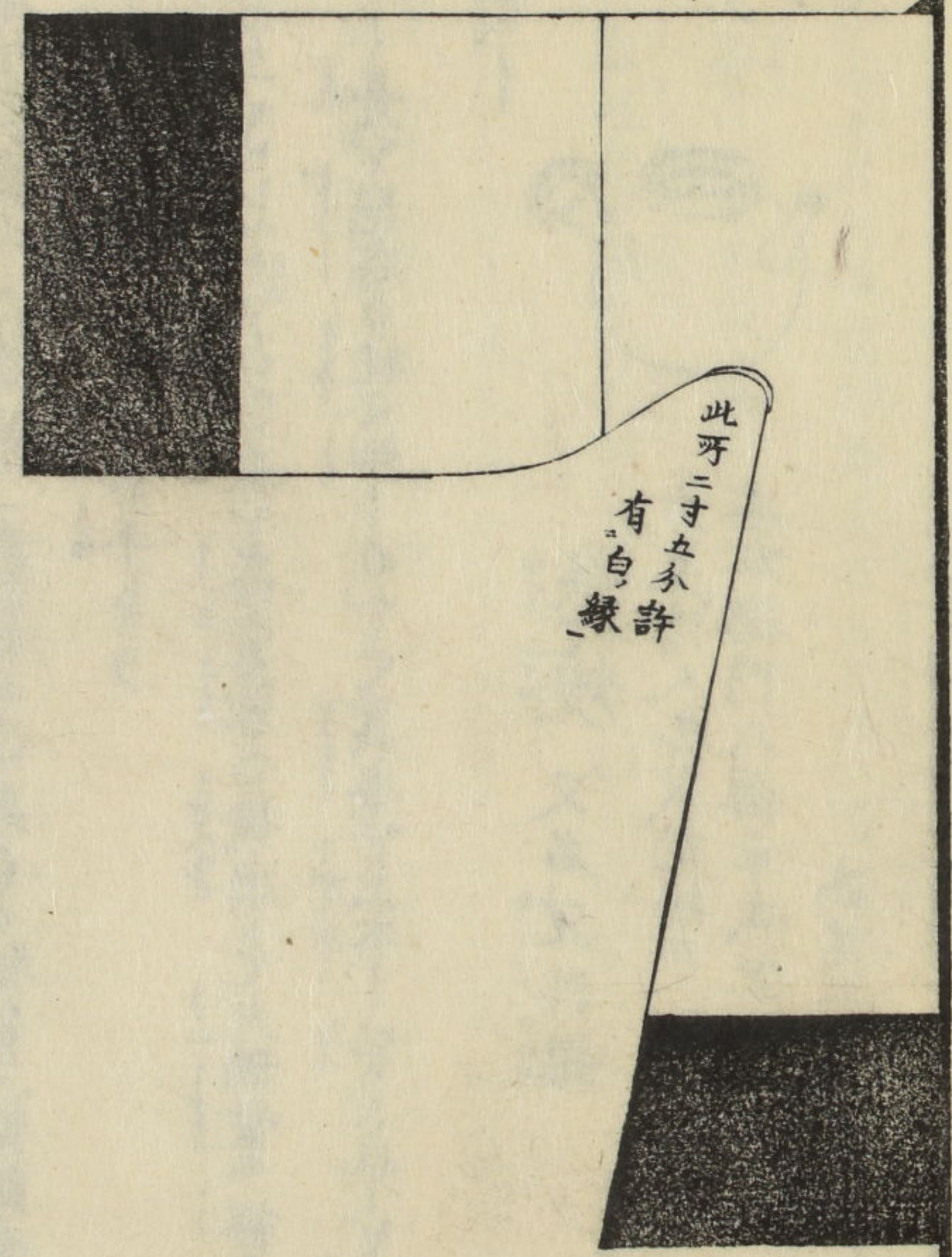




同後之圖

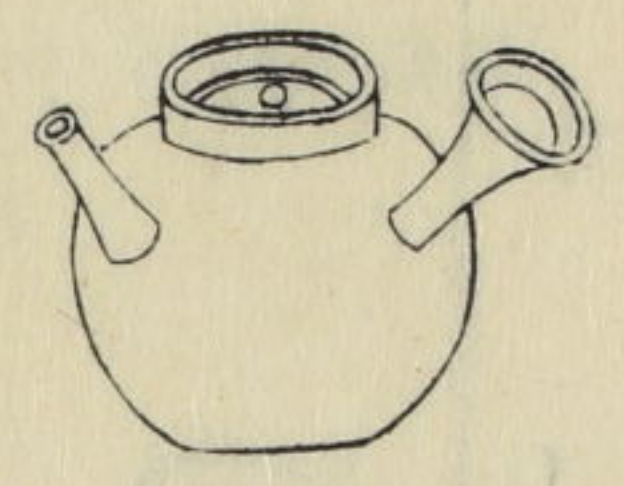


心越禪師名興儔明の浙江金華府婺郡浦陽蔣氏の子あり壽昌無明禪師の法嗣なり始り杭州の永福寺に任職せりとも明末の兵乱を避く吾邦延宝九年



小投化して後天和元年東武小至元禄五年常州水戸盛宗山天徳寺住職と  
同八年九月晦日遷化を行年五十七歳水戸小於其旧地を佛刹と壽昌山祇園寺  
と号し禪師とて閑山と号す壽昌の一派吾邦小傳業とて初より禪師常く書  
画と善し七絃琴と彈ぶの妙手なり

煎茶に用ゆる「キビシヤ」の器と高芙蓉の檢出して大雅堂小語られ  
殊と飲びく是と同志の徒と知りゆんとて其事と上木と弘られと風流の  
深切といふべし



急燒 又名互興鐘  
右見清人具成充船中饗和客  
金右衛門八僊卓式記  
高芙蓉檢出

右次く丙子冬十月大雅堂印施と有此丙子ハ寶曆六年なり大雅山人三十

四歳高芙蓉ハ三十五歳の時なり

芙蓉名ハ孟魁字ハ孺皮芙蓉ハその号なり甲州高梨の人なり高氏なり  
父ハ元軒といひ曾く徳本氏に從ひく医と業とハ芙蓉医と好まざ弱冠の  
頃より京師に遊び書画と愛と好事の一奇人なり篆刺の妙絶といふ海内ハ  
其名を知ざるものなり俗稱後ハ大嶋逸記といふ天明四年四月二十四日東武  
小没行年六十三歳なり

大雅堂名ハ無名字貸成九霞と号し或ハ九霞山樵の字と省きて霞樵とも書  
り姓ハ池野俗稱秋平京師の人なり来舶の清人伊字九小倣く山水と画と文書小名なり  
書画とも一家とて一時の人物とて世の知とるなり大雅常小愛玩の印禪とて地白光なり

寸法如圖 地白光

表

記禱銘

剛剛親柔助易情勁柔  
得中庶幾無過

壬午季冬

蕪庵

裏三岳道者印了

三岡  
階者

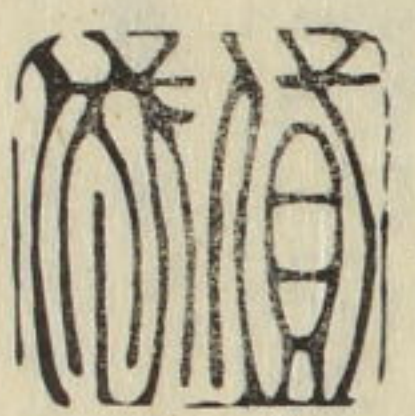
右の銘ハ悟心禪師より悟心名ハ元明号一兩庵又荷庵と云  
裏の三岳道者の印ハ大雅堂の印あり

大雅堂印譜

无名之印



貸成



大雅



東山池無名貸成



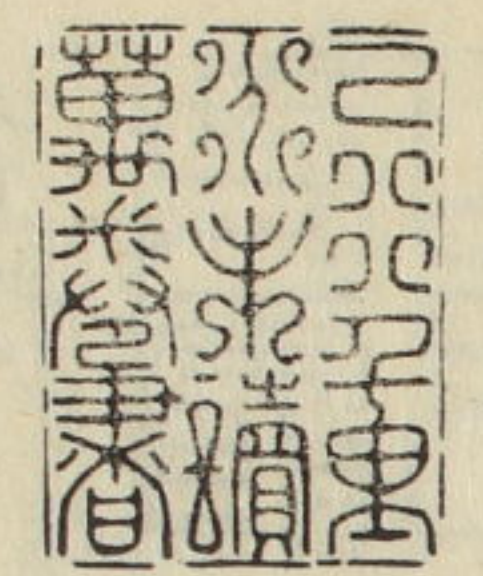
无名



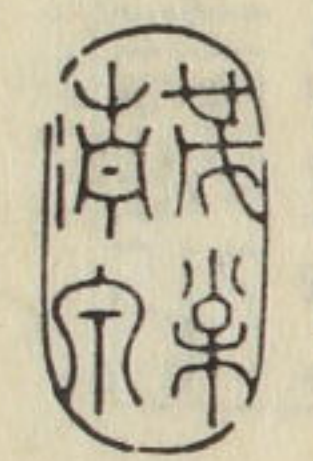
霞樵



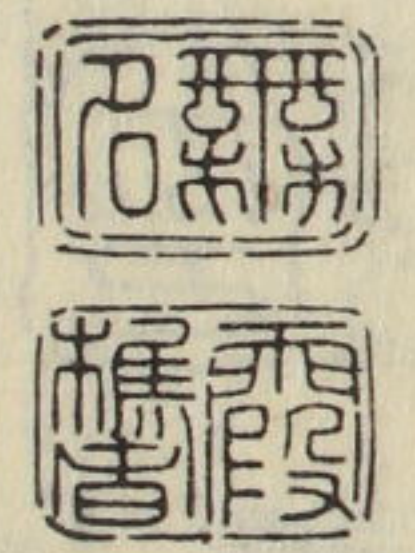
已行千里路  
未讀萬卷書



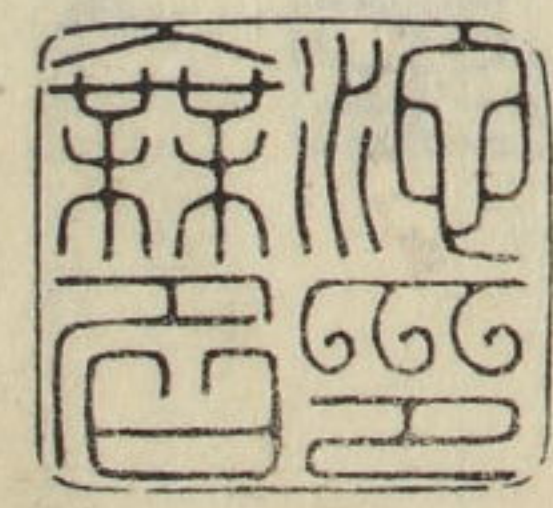
茂松  
清泉



無名 霞樵者



池無名印

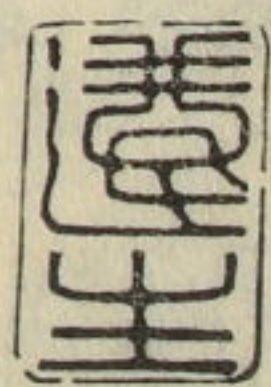
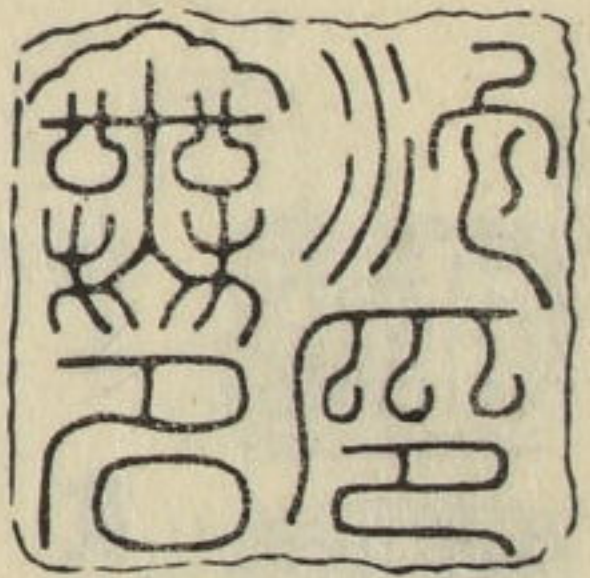
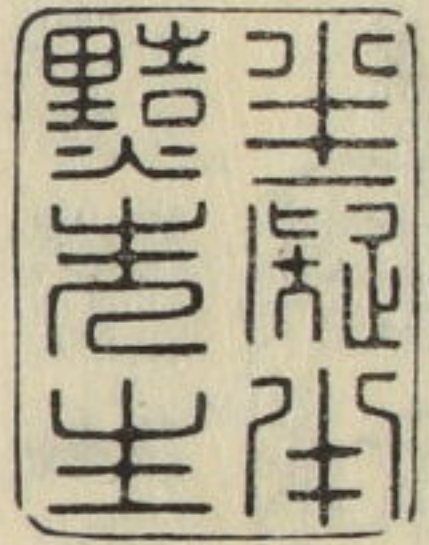
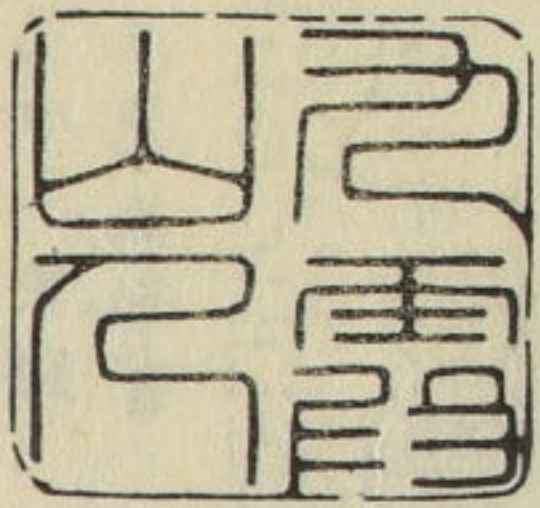


九霞山人

半癡半黠先生

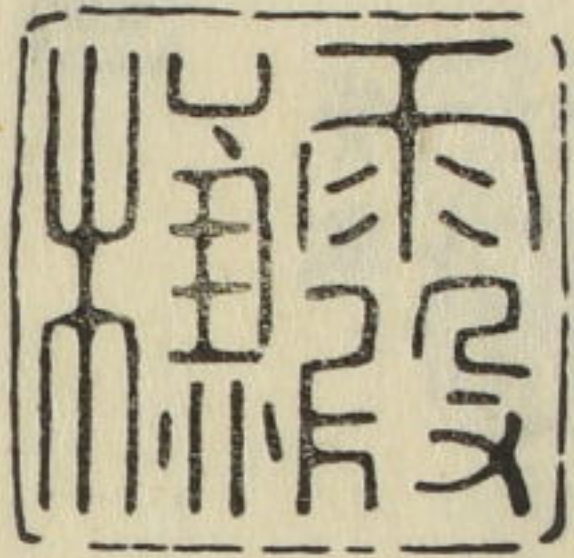
池無名印

遵生



霞樵

三岳道者



大雅堂年譜

享保八年癸卯五月八日生

父池野嘉右工門母

九 二歲

十 三歲

十一 四歲

十二

五歲

十三

六歲當年ヨリ十一歳迄三條寺町養拙門人清光院淵ニ書ヲ學フ古門前茅庵ト云人ニ素讀ス

十四

七歲

十五

八歲薩摩人山名主計号潛龍養拙流此從テ書ヲ學フ

十六

九歲

十七

十歲

十八

十二歲

十九

十三歲綾小路麩屋町通内藤靜舟ニ素讀ス總ニ二年也

二十

十三歲三條極壇玉鹿寺内清光院一井ト云人ニ書ヲ學フ一井ノ門人故ニ一井ハ養拙門人三上次郎右工門門人ナリ

池野ト云子并印アリ

元文元年丙辰

二

十五歲友人望月照溪ノ好ニ因テ画法ヲ學ト為溪ニ書ヲ學フ書店ヲ開キ扇ヲ寫初ノ唐画ヲ扇ニ画ス八種画譜ニ倣フ袖龜堂ト号スニ條種ノ口ニテ母子二人也池耕字子職号爲龍

三

十六歲

當年初テ柳太夫ニ逢

四

十七歲

五

十八歲

寛保元年辛酉

十九歳當年高孟典ト友トナル  
孟典ハ芙蓉ノ一ノ

二

二十歳 聖護院ニ移ス大雅堂ト号ス池勤字公敏  
号九霞俗称菱屋嘉左工門

延享元年甲子

廿二歳

二 廿三歳

三 廿四歳

四

廿五歳

寛延元壬戌辰

廿六歳

當年葉葭堂十三歳初テ面會ス

二

廿七歳 初テ富士山ニ登ル東都ニ遊ヒ松島ニ到ル

三 廿八歳 越中立山ニ登ル

寶曆元年辛未

廿九歳 白山ニ登

二 三十歳

當年熊野ニ詣テ  
南海先生ニ謁ストモ云

三

三十歳 始テ南海先生ニ再法ヲ受ク

四 卅二歳

五 卅三歳

六

卅四歳

七

卅五歳

八 卅六歳

九 卅七歳

十

卅八歳 育テ七百ヨリ白山立山戸隠山浅間山ニ上ル荒舟山富士八級ニ至ル  
芙蓉 大年同伴ス

十一

卅九歳 六月十日富士山ニ登ル七月六日飯路  
秋葉 蓬萊寺 伊吹山ニ登ル

十二 四十歳

十三 四十一歳

明和元年甲申

四十二歳

自二年至八年此間無奇話

安永元年壬辰

五十二歳

同五年丙申

五十四歳 四月十三日罹病卒于葛原  
卅堂葬于船岡浄光寺

異名 池亮

字爲龍 袖亀堂

池耕

字子職 号爲龍居士 危荷葭菴  
待賈堂 林煥ノ名ヲ

池勤

字公敏

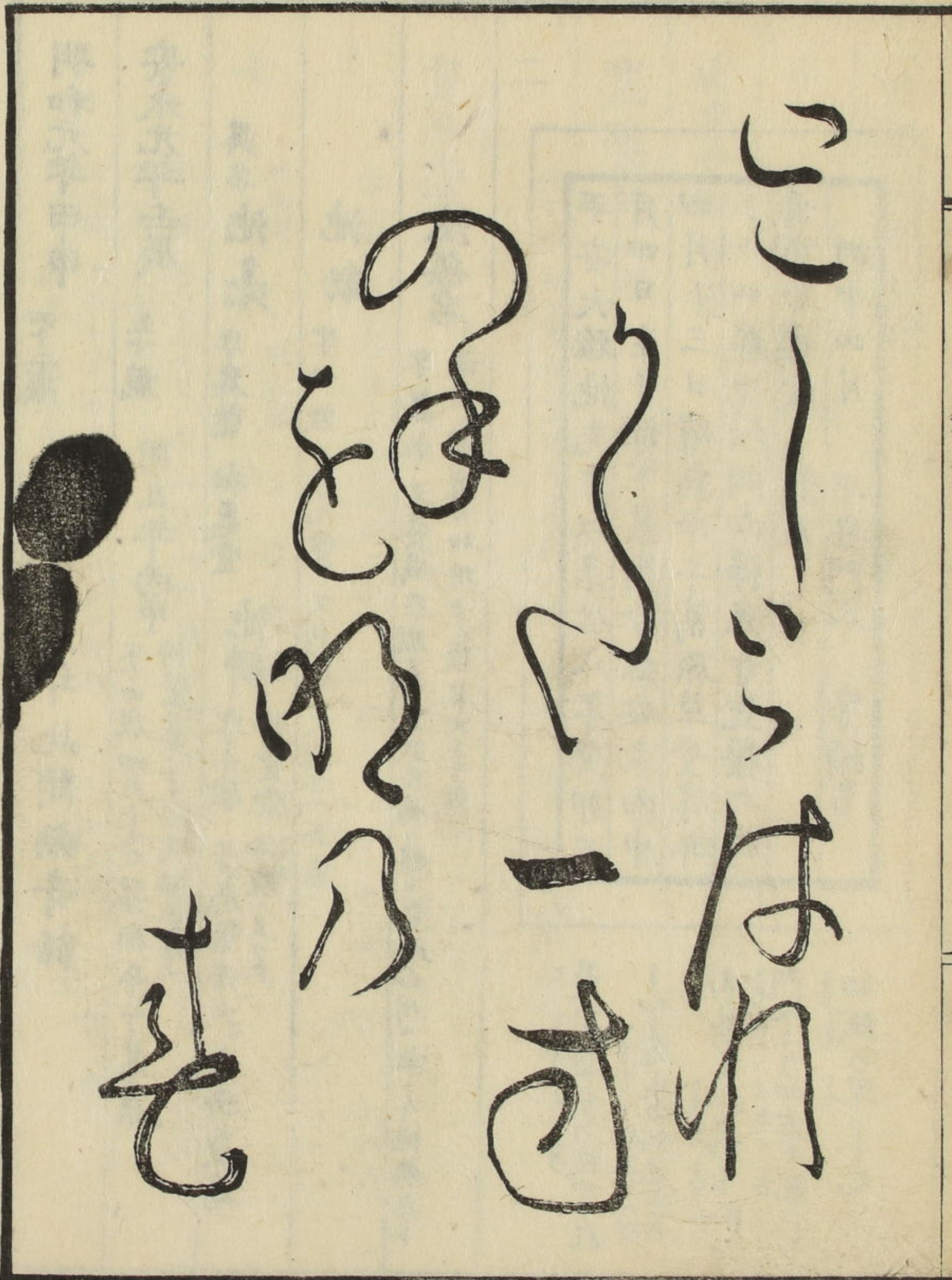
号九霞 又竹居 大雅堂 玉海

池無名

字戴成 又貸成 廿歳ノ時東武松嶋ニ遊ヒ翌年加州ニ趣トキ池無名ト  
改ルト云 或ハ加州ニテ改名ストモ云

平安大雅池先生以享保八年癸卯五  
月四日生于都下某街今茲安永丙申  
四月十三日罹病卒于葛原草堂享年  
五十四葬于船岡南浄光寺先榮之側  
焉寅告遠近 諸君  
丙申四月 平安門人 等頓首

是ハ大雅堂の没サレ  
ト遠近の知己又告  
ルル此文ト上ル  
門人より四方配リ  
切紙の写し



いーはれ  
 のほ乃  
 一可  
 七



七

奉賀

大雅先生知命之壽

大衍九數のほりな多手録也

七十三叟惠達信

陸舟の漁そののし 富山高

兼葭堂孔龔

又り出て的を草に福有也

米洲義方

青串の祇伝を乞

瀟湘七十は疾

宦直字光

右掌痕帖の大雅堂五十賀と祝する所ありて兼葑堂の所藏也

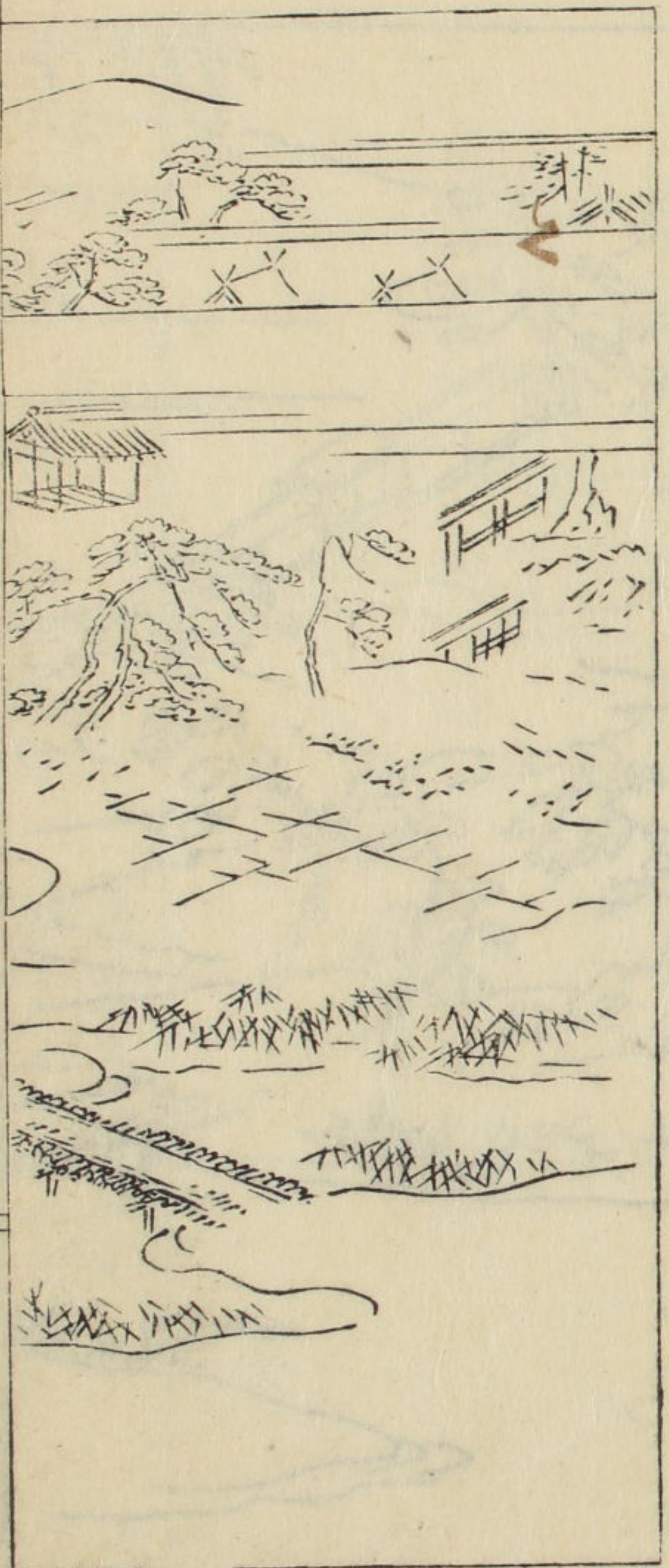
○京師下鴨の神庫の所藏又三十六歌仙の繪巻物なり書の後京極良經公画に左京  
大夫信実朝臣よりむおのく省像を画されども其初住吉の二首ハ風景と画り  
其光景古風にして今の圖より違ひく奇らきと又模写と

ふはははははははははは

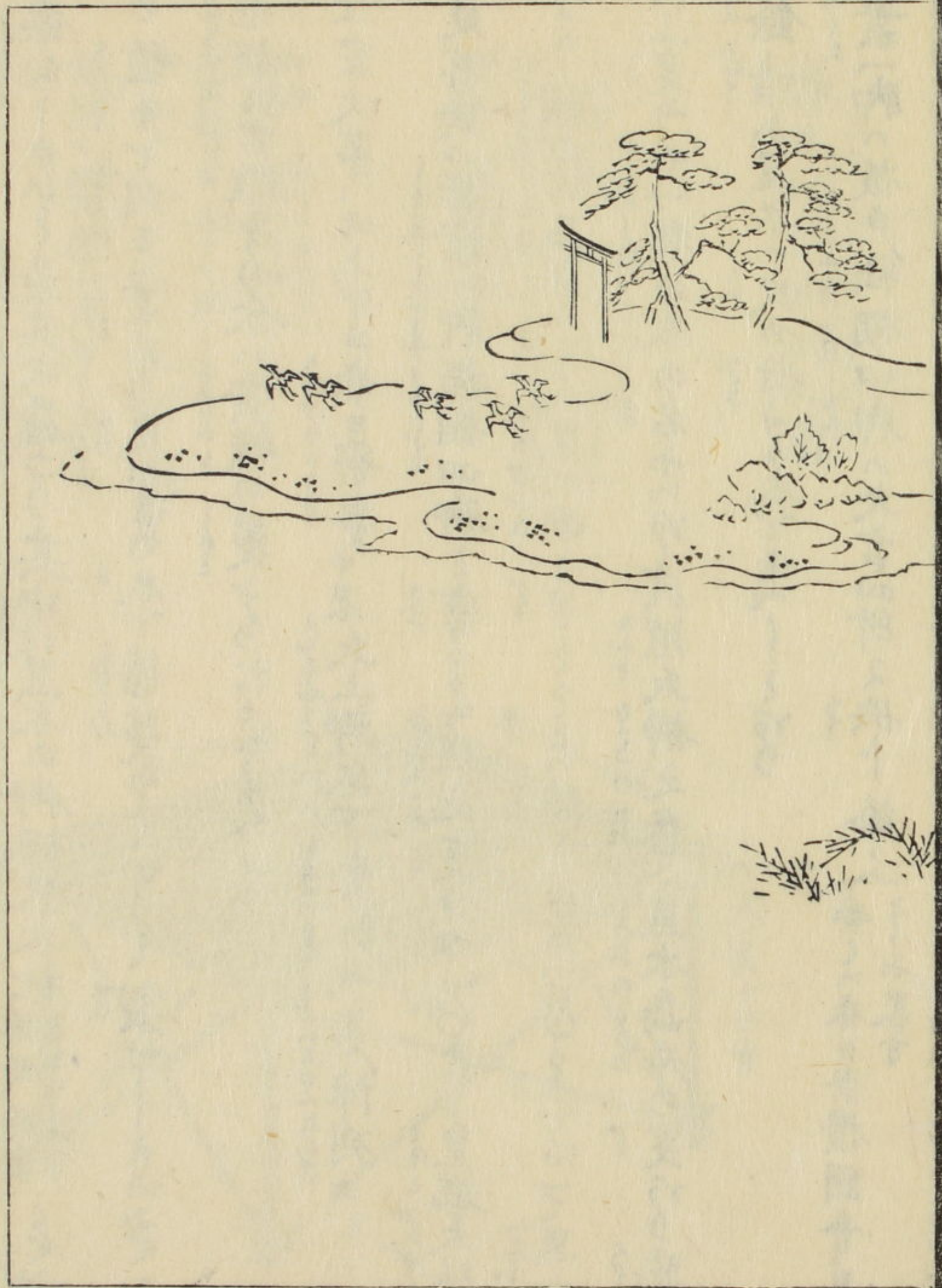
ふははははははははは

行あそび

ふははははははははは



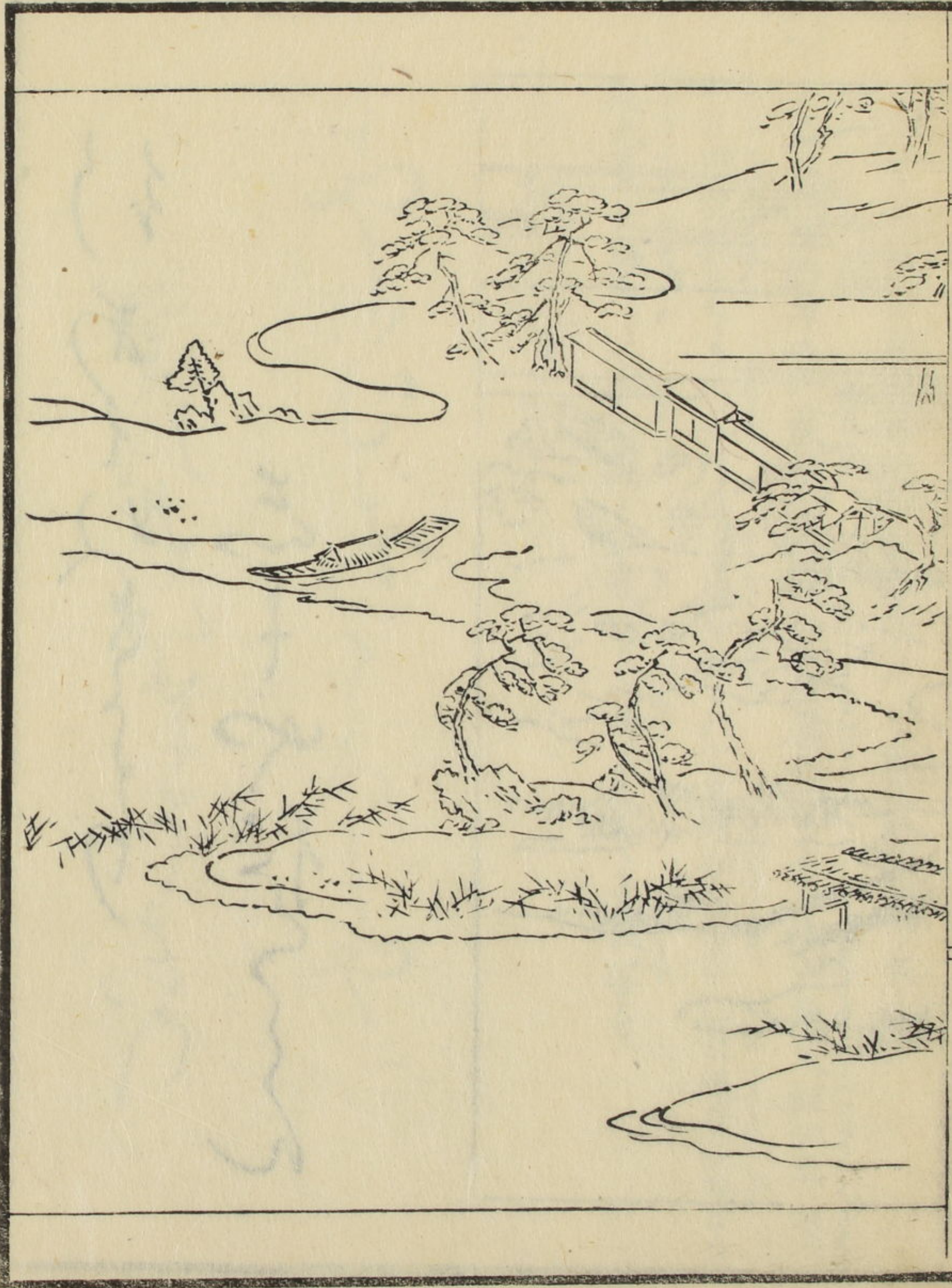




立壹尺一寸四分  
横壹尺八寸四分

東山畫譜卷之二

八



東山畫譜卷之二

九

○南都春日大宮の例祭は二月十月兩度上申の日も行ける皇都より御勅使

黍向いゆい最其式嚴つり其中に黒木の御棚黒木机御棚 御案とて神供

の種々を列る安承りり皮つきの木と藤蔓あはれをくわく製せしめその

形頗る古雅なり木ハ黄檀の蔓あはれならるるなり

江家次第云上申日春日祭事中畧氏上卿以下費札次第陣列云々

延喜式に椀案一脚椀棚四脚と書るも則此度よりいづきも皇都大膳職

より調進の品よりよ黒木棚と号するも總て皮のつきの木とて黒木と

いふ更りて一種の木の名ありけ源氏柳之卷あはれ黒木鳥居の更りり花鳥

餘情あはれ黒木ハ皮の付くる木と云べしと有り

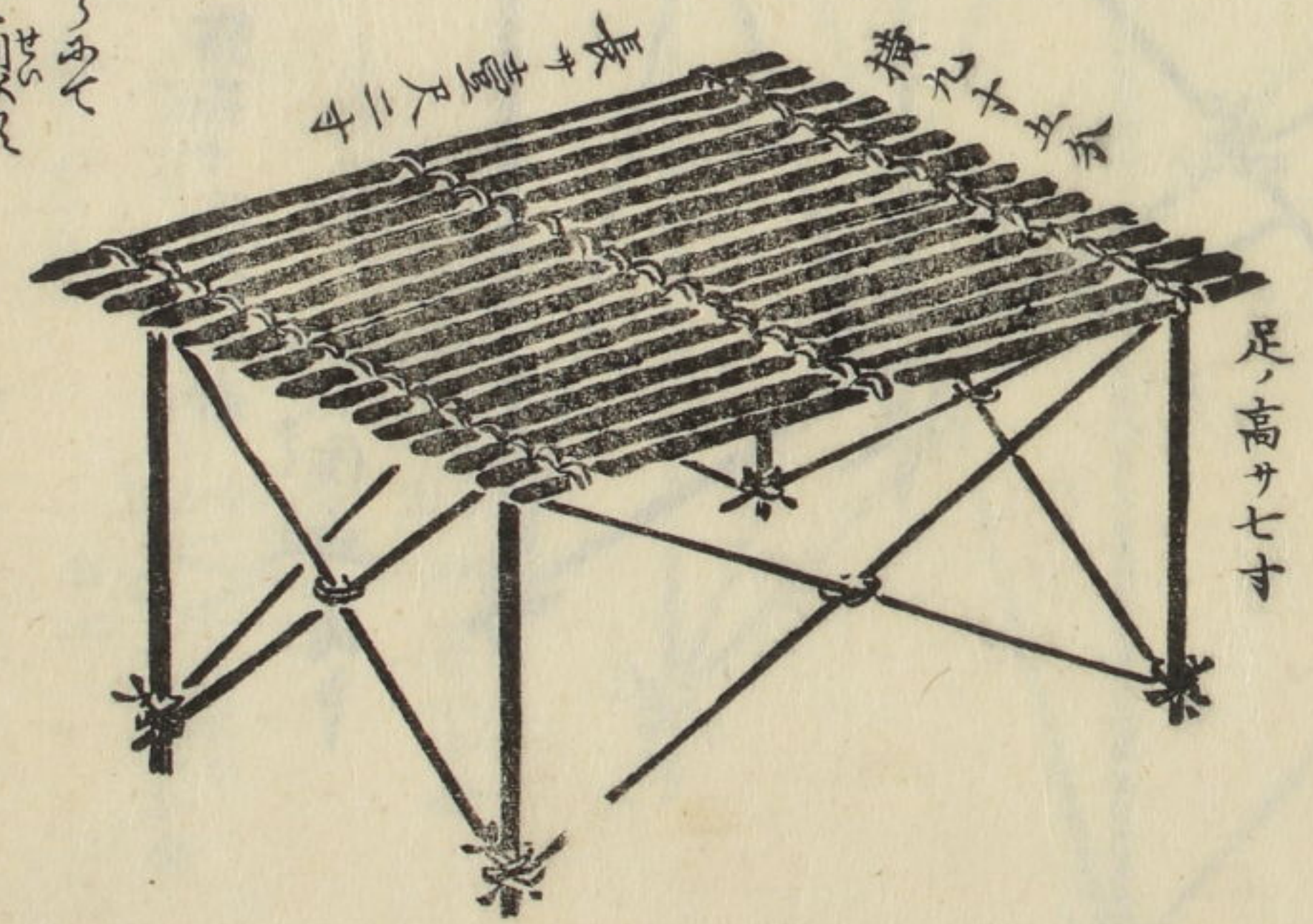
案一脚ハ後戸社棚四脚ハ大宮四所又供ト給ふ委あはれ春日祭禮圖會見あはれ

春日社黒木机之圖

小の方一脚ハ後戸社あはれ供トあり  
被戸社ハ二の鳥居の内あはれ傍あはれ有  
祭神ハ瀬織津姫あはれありとぞ

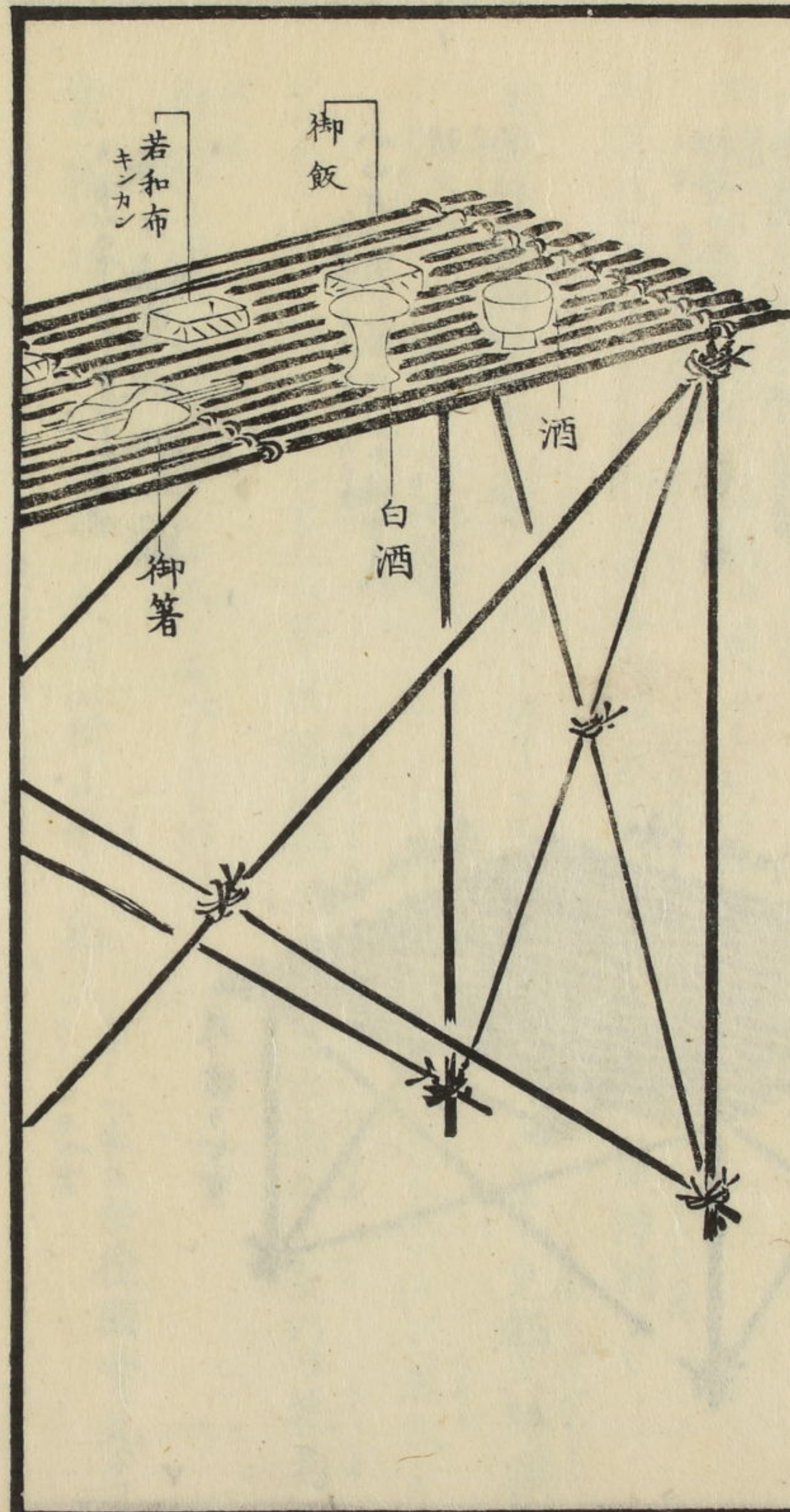
伊勢の祭式ハ結机あはれとありの  
是あはれ向ト草を以てあはれあり  
檜葉あはれを結ひつくる神供あはれハ用ひ  
官使あはれの饗應あはれハ用ゆと聞ゆ

皮つきの木と藤蔓をくわく製せしめ

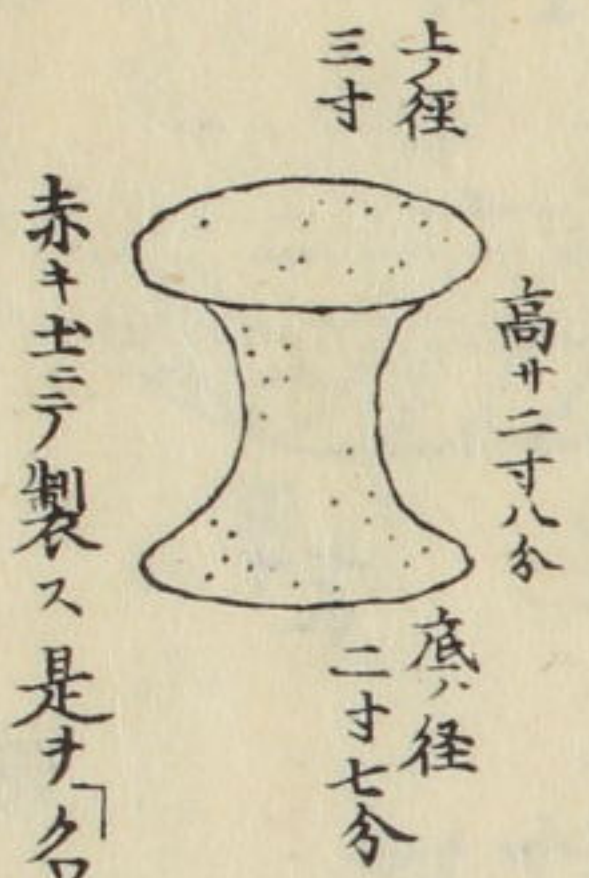
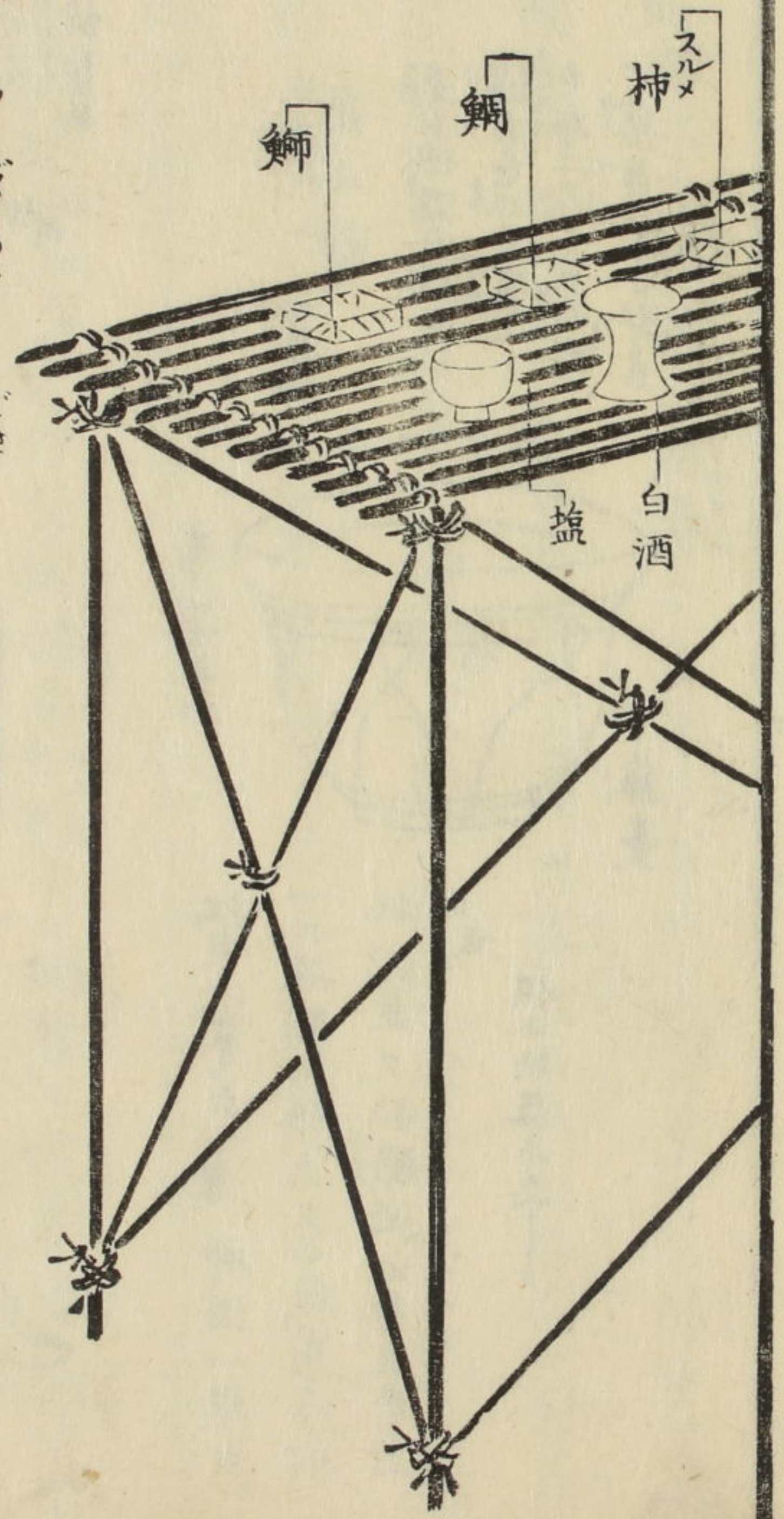


同大机之圖

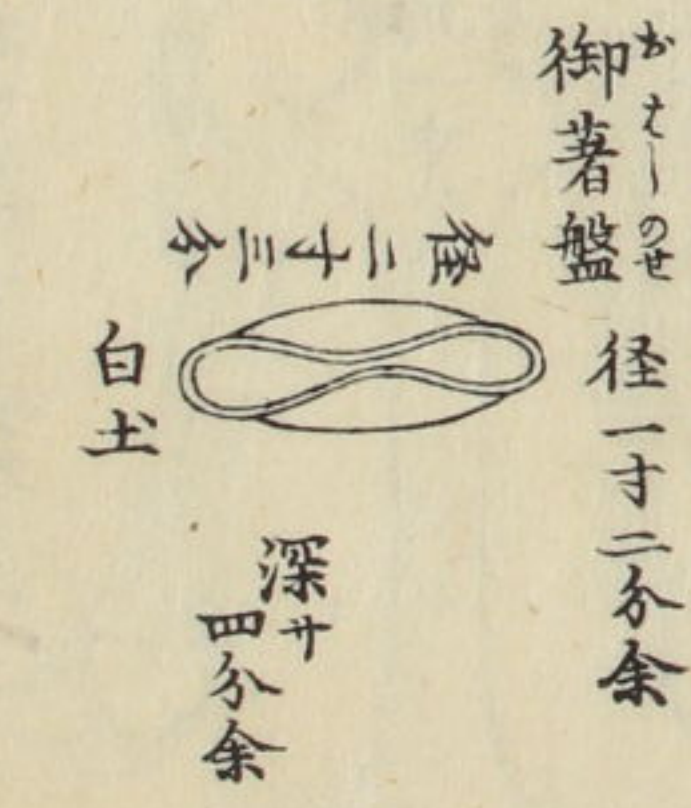
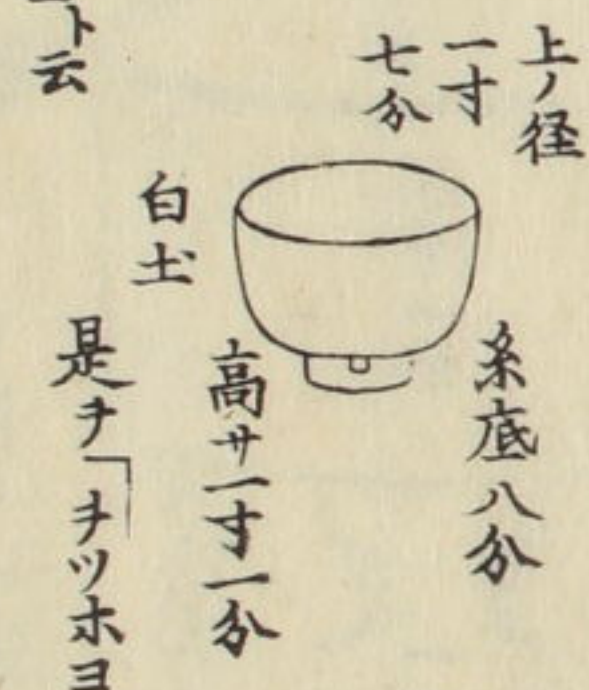
幅壹尺二寸許 長サ三尺許 惣高サ三尺八寸余  
製作前ニ同ト



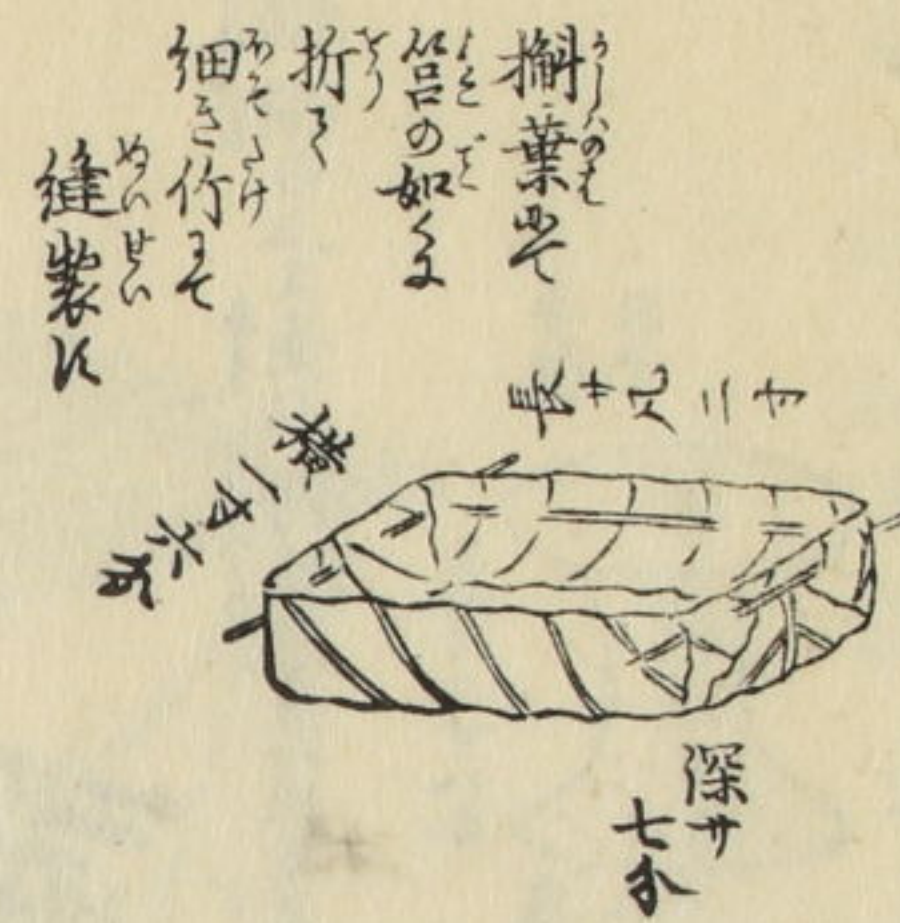
据棚の上並に御供器のれも土器あり



赤キ土テ製ス 是ヲ「クワイ」ト云

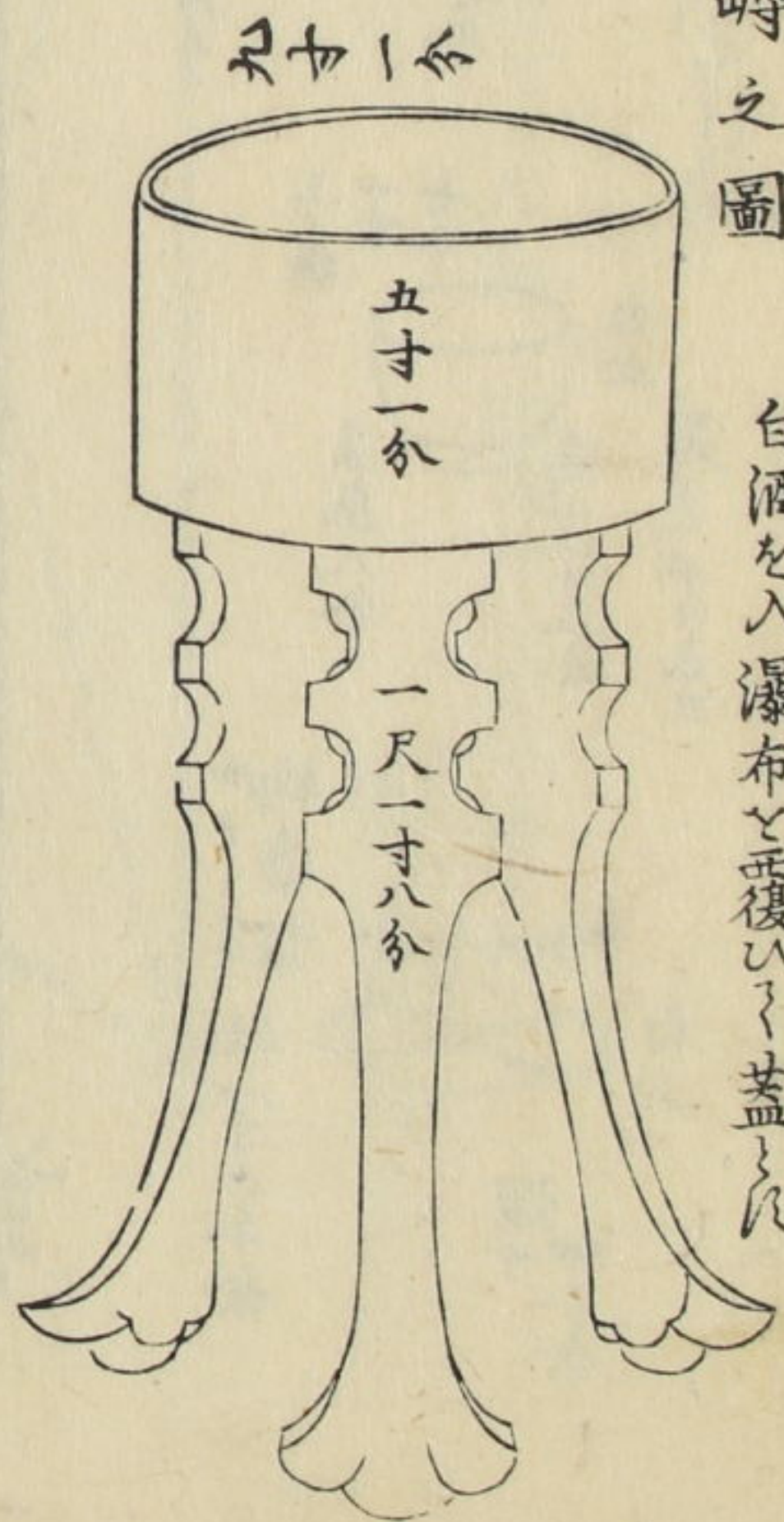


榊御膳 又榊御供とも云



樽之圖

白酒を入瀑布と覆ひ蓋と云



江家次第云上畧 神酒一樽立

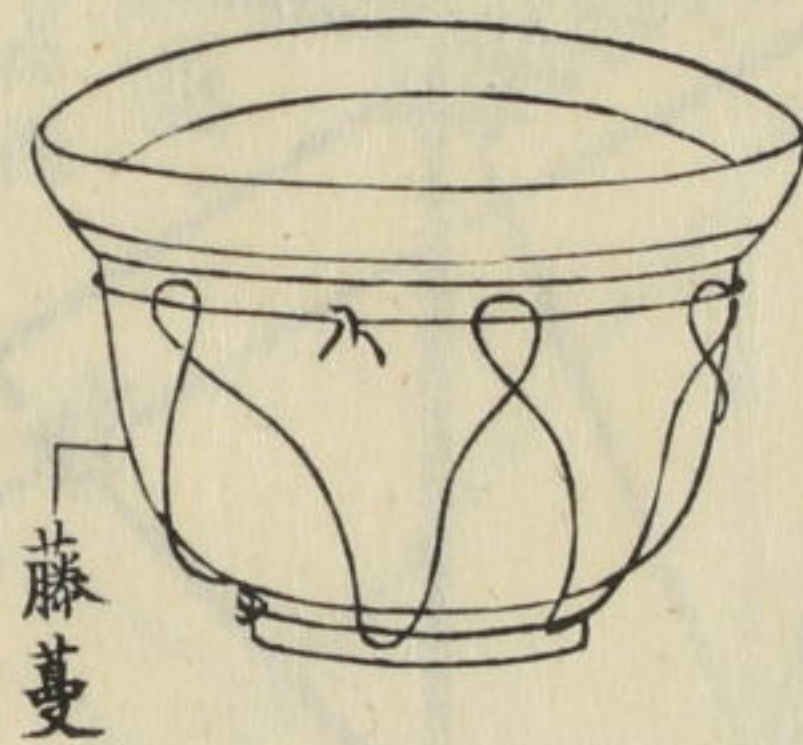
一二殿間一樽立三四殿前与御机相並又社釀酒四缶立中重云

俱此器あるべし

缶之圖 土器也

是も神酒を盛て 瀑布を以て蓋と 是布二尺とニツ折ひて 藤蔓へをむと云

ハカ、リヤ、ハカ、リヤ



樽ハ延喜式ヲ大酒樽中酒樽と云る是るるべし樽ハと云つち樽あり

三才圖會曰缶音フ 缶音立秋音也虚而善容外員而善應中聲之所

自出字彙曰缶瓦器所以盛酒漿也秦人以節歌詩陳風云坎其擊缶是也

前圖と云る「あつがに」ト云る土器ハ延喜式ハ春日祭料土坑十合と云るものなり

榊の御供ハ圖と云るごとく榊葉と管のごとく折り細き竹あり釘製せしものなり

帝都白河家神祇官あて行り鎮魂祭中宵月も榊葉とハ枚圓く重て細き竹

あり編つけ盆のごとく製し中飯と盛り神小供は是と云るその御供と稱を

其製小異りといへども榊の御食ハ同ト是る人上古より葉椀葉手といへる器

あり和名鈔祭祀具葉手漢語抄葉手比良天延喜式又葉椀又葉椀

葉盤比良豆類聚三代格ハ拍十五把技手十六技料釋日本紀葉盤ハ拍葉ハ

盛物也今の世の園子とて榊餅あどつるも此遺風あり

○衝重とて入る臺の賀茂祭あり必だ入事する其製傳つるに元禄七年

賀茂祭御再興の時いろく合儀なりて出来たりとて通例の三方の臺の

横長ありて低くありのり白く塗る模様と画く是より茶道は甜香を以

遠山と画く俗に遠山臺とあづけ早春の慰斗臺とて小專し用也故に

有職の道は心づかりの衝重とていつく豫知とてども余人は遠山

臺とて入る物と心得たり原來有職の方より遠山の画は若松のひの松と

鶴錦花鳥四季の花ホちり尤衝重とて急の設は管の蓋と仰せけり

のせ用ひしゆえは衝重とていつく衝重とていつく衝立の屏風とてども

其時よのどとてははははとして号するなり胡粉あり白く塗るは様塗と

つり公事根源臨時客の條は朱器様器とて入る夏つり様器とて入る木地の

器のよとて様塗とて入る生地とて用也と疎く木理を隠しんは白く

塗る物とて生地と同様なりとて寸法は普く知る所るれば是を敷き

折敷の面は冊木とて柳のひの樺とて冊とて結びたり是を蓋と仰

せけり筒は冊つりたる形なり又筒の歩合せと折敷の歩合せと左右の違ひ

あり則ち翻つる證ありとて

○和及郡山の鴻儒谷口元淡老の製せり圓燈なり其製式は云

上下圓捲小板建三柱連接之別如前式少大而北柱之半面各貼紙下

製圓臺安仕者其北回旋如輪藏様圖則柱々相對開則重複上鈎

鐵鉉提之架細鐵挺於柱之兩柱擎出鐵環載缸起植鐵牙挿燭臺

設抽匣而施小環內納燈心發燭之屬臺柱鐵器皆漆焉上下板相去壹尺八九寸下板去臺二寸許臺高二寸余圓徑九寸左右

沙門英辨書

○洛西嵯峨清凉寺本尊釋迦如來の尊像ハ天竺毘須羯摩の作りて赤梅檀の香木と以て彫刻せる所なり尤天竺より唐土へ渡り余後日本へ渡ると以て三國傳來と稱し或云三國傳來ありて第三傳の佛像なり其證ハ法苑珠林一ノ梁武帝天監元年夢檀像入國因發詔募往迎決勝將軍郝騫謝文華等八十人往達其狀舍衛王曰此中天正像不可適邊乃令卅二五更刻紫檀十年騫等達于揚都扶桑畧記永延元年二月入唐裔然歸朝靈山第三傳釋迦等身

像十六羅漢画像持來ル

元亨釋書裔然傳然於汗都西菴門外啓聖禪院禮優填第二摸像乃雇佛工張榮摸刻而得之其像今在嵯峨清凉院

百練抄永延元年二月入唐僧裔然歸朝隨身第三傳釋迦像十六

羅漢画像並摺本一切經到蓮臺寺大臣公卿以下之車奉拜之

無題詩藤原教基春日栖霞寺即支自注曰茲寺安釋尊第三傳之像

栖霞寺ハ今の清凉寺なり

それハ天竺毘須羯摩の作りて尊像を得んとて梁武帝使遣一所望ありしども舍衛國の王これと許さば更ニ佛工を命じて紫檀と以て刻すの震且よ送りしなり然ると亦日本一條院朝東大寺の裔然法橋宋國へ入る

聖禪院に於て天竺より摸し渡せし紫檀にて彫刻の第二の摸像拜礼に  
 これより佛工張榮と雇ひて之を摸刻せしめ携へて鄭仁徳が船に乗て  
 歸朝し則今清凉寺在所の尊像これなり斯有る三國傳來のなり  
 第三傳の摸像と云ふ

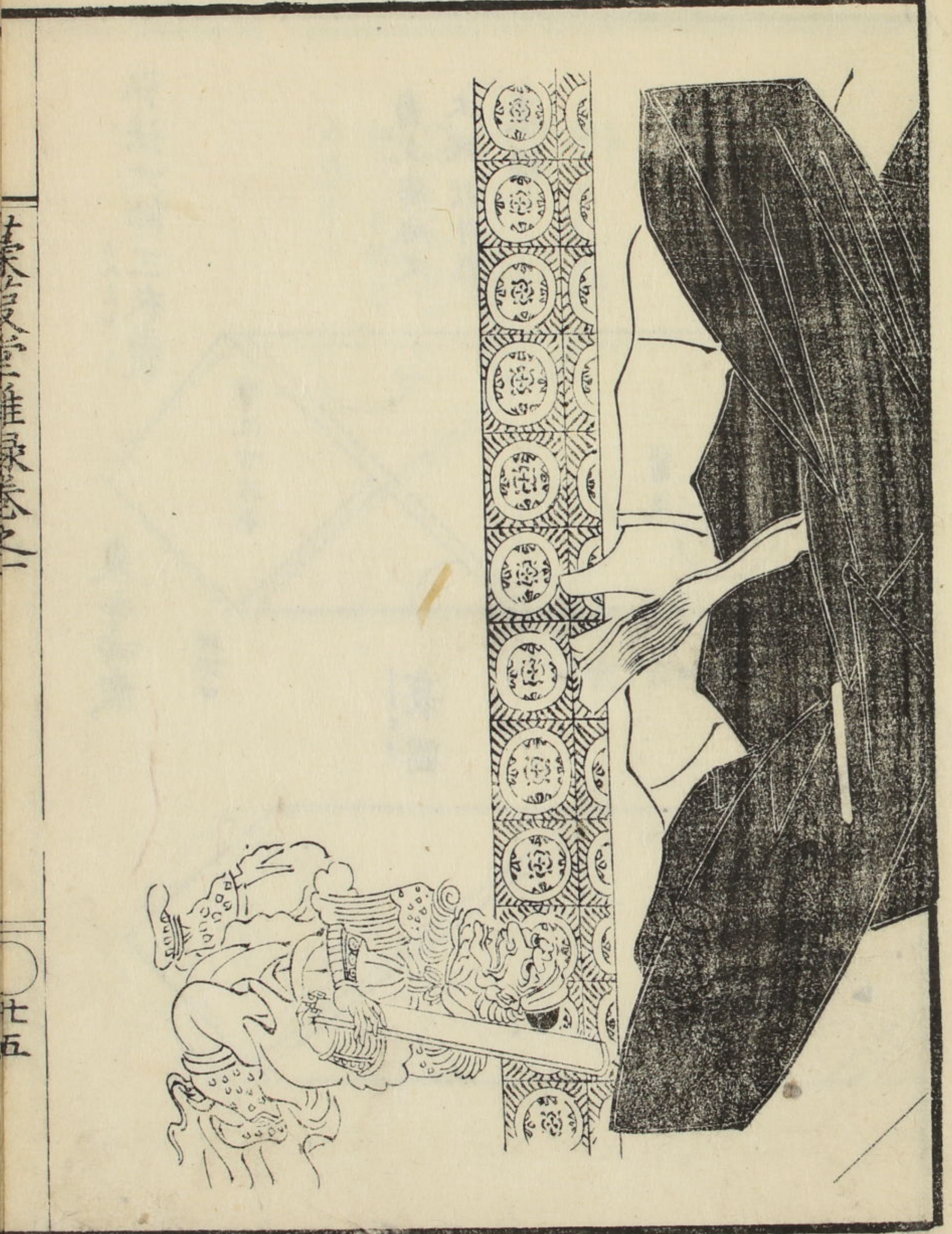
和漢三方圖會云天竺優填王在祇園精舍誹毘須羯摩以赤梅檀摸刻  
 生身二傳尊容然佛滅後有弗舍密多王亡天下佛法於是鳩摩羅  
 取佛像逃至北天竺龜茲國其後入震且國而齋然入宋時因夢想取來  
 蓋彼像在汴都聖禪院齋然令佛工摸刻新古換之取真像來矣  
 此説又據の三國傳來の真像と云ふ然れども何書より説りや  
 詳しうは尚後人の考へて俟の

○南都弘仁寺の什物小野篁朝臣像 空海筆 弘法大師像 小野篁筆 二幅なり

俗に互の御影と云ふ谷文晁大和紀行云寺僧云此像と写せ忽毫波目々  
 て死に古來より写せし人なりといふ予云此像何の爲に作らん哉後世  
 傳人が爲し繪さし今已に糝糊せし百年の後おの愈損どく全形と見る  
 夏より乃ち一本と写し寄附とす然る時此像と繪し人の意と永  
 くつらりいへり死にべんと申しれば寺僧もあつれく許しと写させり  
 乃ち写し一本と寄附し一本と携へり云  
 此像と文晁子の写し得る夏に今も尚南都の人の言傳へく美談と  
 ○糝糊字義平六丁右云 漠湖也分らぬ湖の事なりとせぬ  
 良あどは用也云



小野督王朝臣之像  
このくわしやうぢんのがしづ  
 南都弘仁寺所藏



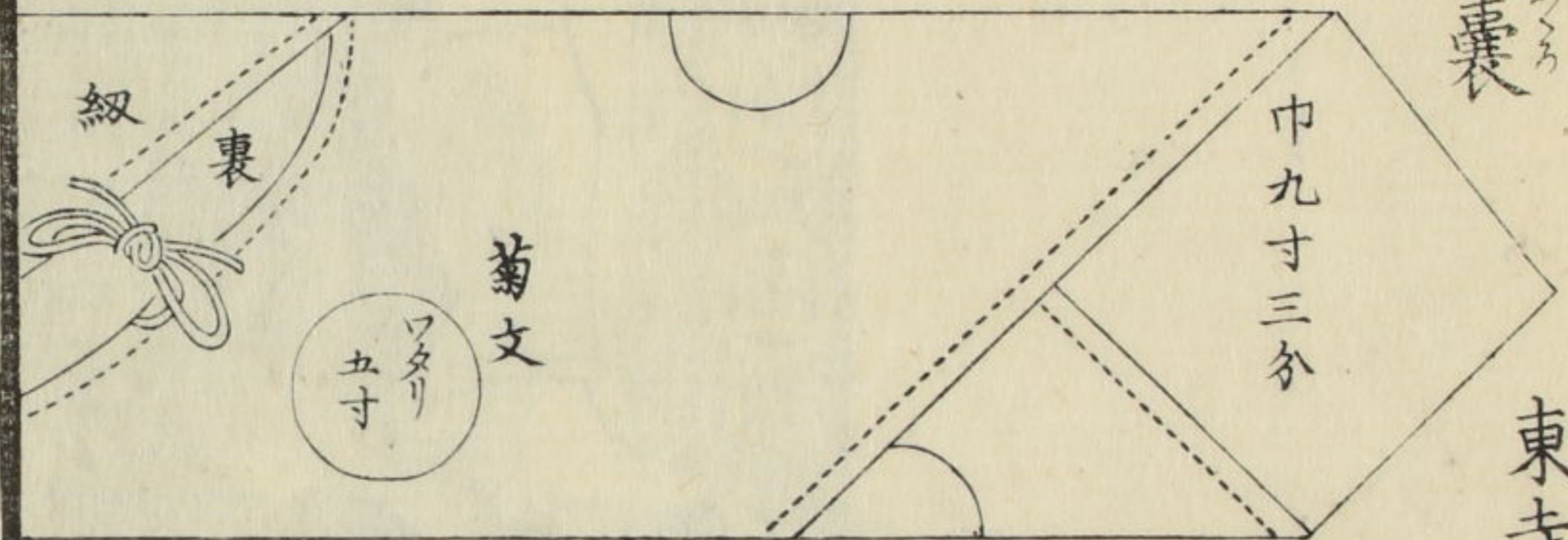


弘法大師三衣囊

東寺所蔵

菊文錦地文  
木賊深青色  
裏絹

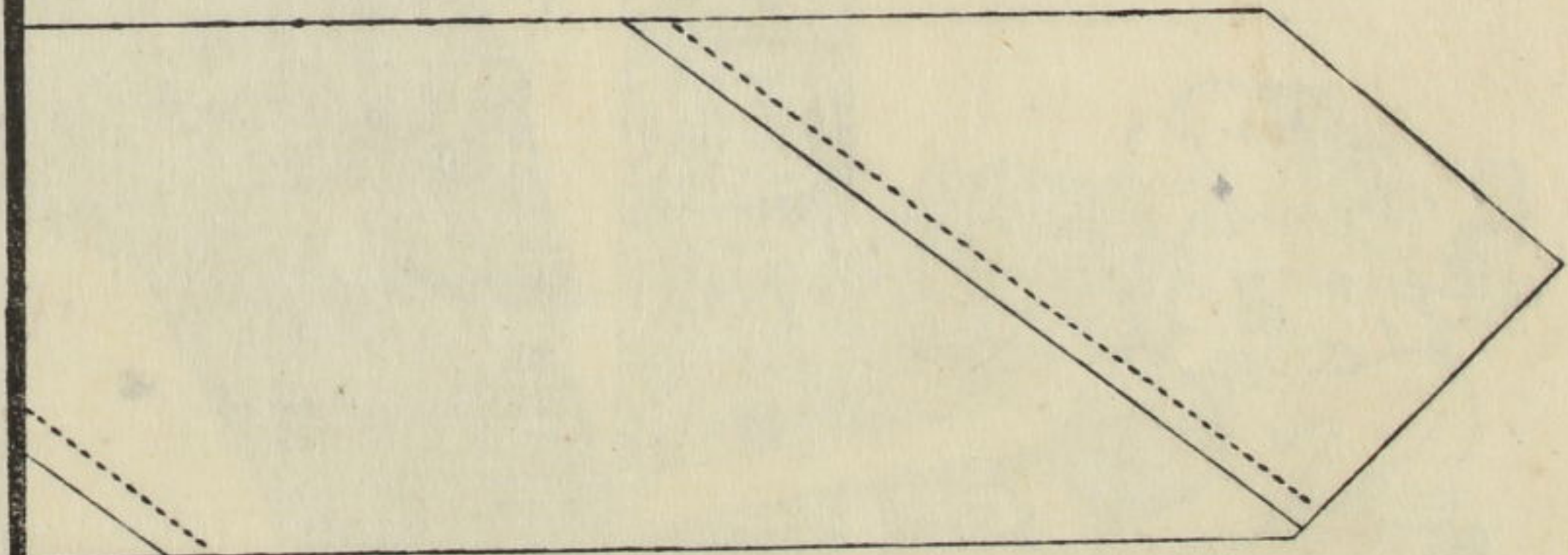
表圖



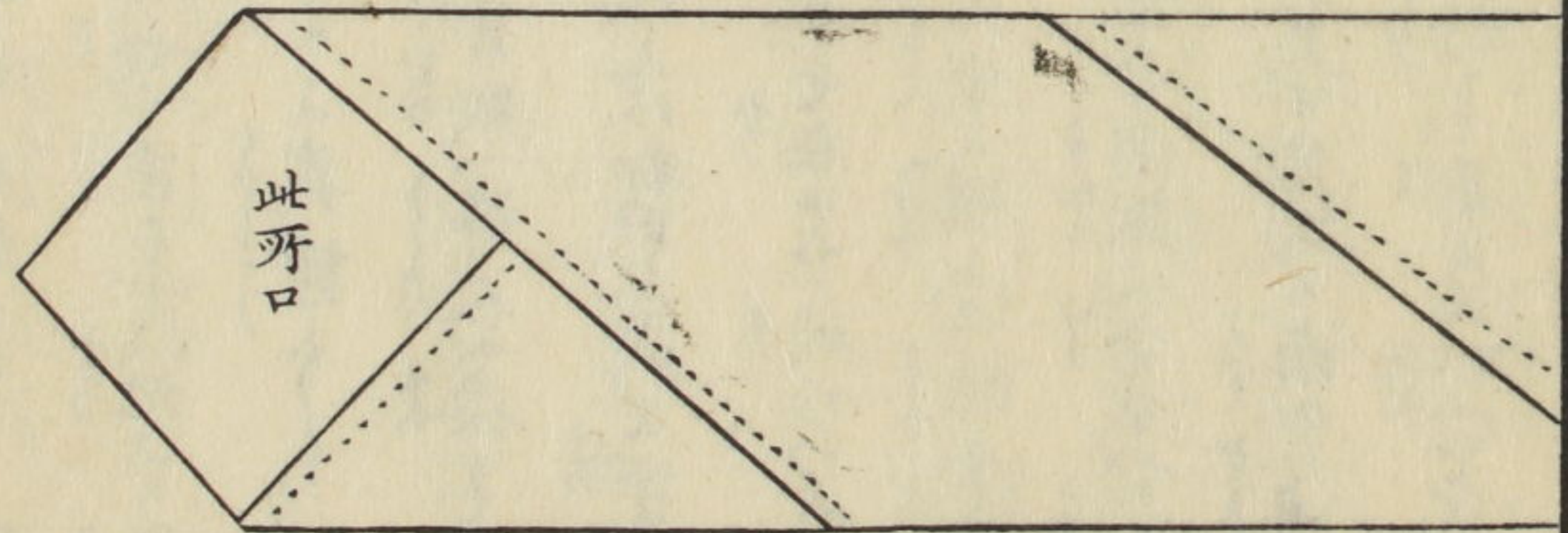
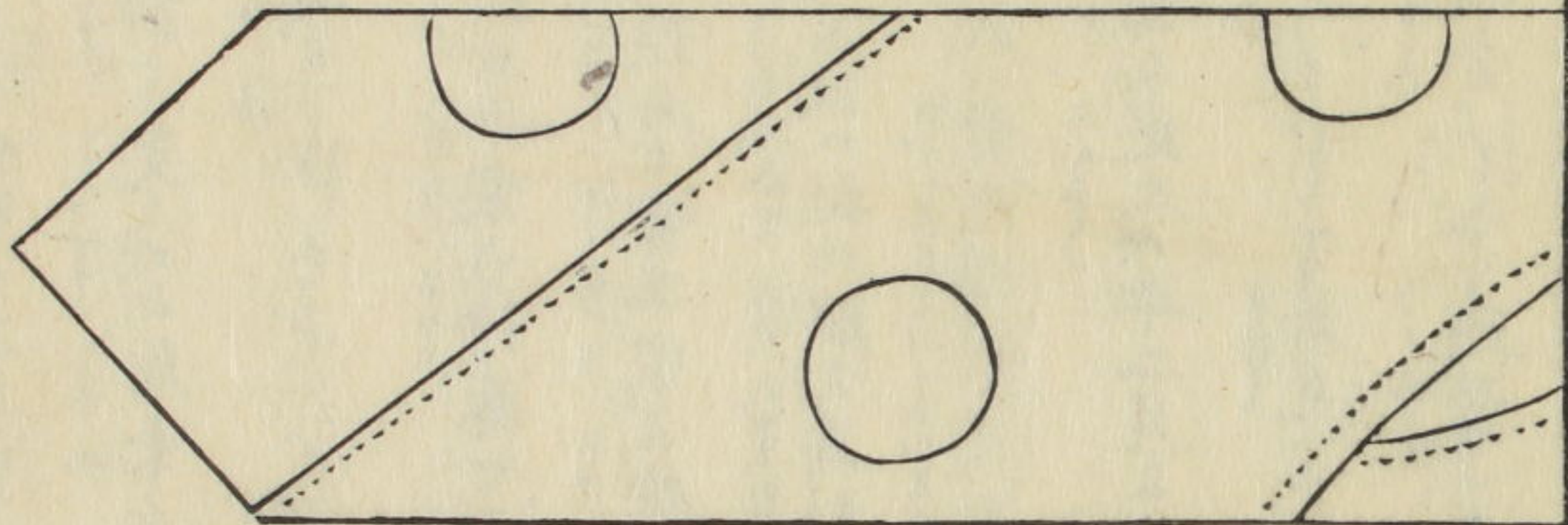
長六尺九寸

裏圖

此所口



按入大なる物ハ  
左右の口より出  
入せし小なるものハ  
中の口より出入を  
紐めて口を結び  
くさるべし



X

○南都東大寺の大佛供養の時平家の侍悪七兵衛景清衆徒の安小身とあり  
頼朝卿と討んと計り、度人口不賸衆と専實説の如く言ふた処より且後、盲  
目とあり日向の國より下りしをどりて説り、西段とも其證あり

長門本平家物語云平家の侍悪七兵衛景清鎌倉殿へ降人又泰りりりれ、和  
田左門尉義盛は預らる昔平家又候し様も少も口へ、和田左門は心も置ど一、座  
とせりて、盃先又取或は挺の服又馬引と奪り乗りて在れば、持つひも他人不  
預させ給へと申され、常陸國住人八田四郎左門尉知家は預らる鎌倉殿大仏供養  
の隨兵の守護の爲、建久六年二月、御上洛同三月十日南都へ入せ、大衆忍て引  
つら恐る中、小怪しむる者見れば、梶原と名をせ、ひつる南の大門の服又怪  
しむる大衆の中へ、搔分とて、頭曩を袈裟と引剥き見、髪と剥て頭と

剃りりり何者ぞと問ふ、平家の侍薩摩中務丞宗助と申者あり候也、夫ハ  
いふと問ふ若やと君と名をいふ、泰せいと申也と申せ、鎌倉殿おらつるひて汝が  
志神妙也と召置まゝ大佛供養果々都へ御登有と宗助と六条河原あり  
斬れりり同書云上総悪七兵衛景清降人又泰りりり大仏供養の日と筈へ、建久  
六年三月七日まで有る湯水と止め終り死なると云

同古写真字本云上総七郎兵衛爲降人被預、和田左門尉義盛子細申被預、八  
田四郎知家成法師在常陸國大佛供養、三月十三日先立自七日以前断  
飲食湯水喉不入供養日死彼意趣人不知

按、長門本十九又知盛の子知忠が法性寺一の橋、忍び居ると後藤基清  
が攻寄し條あり、越中次郎兵衛盛次上総悪七兵衛景清も例の生上手のれい

皆落ふり 云 山城志云景清宅東福寺門前二橋北  
文永七年施觀文在三厘寺蓋當時寓居

然まべ方への残黨は荷擔して復讐の志は有るをくも其本意達せられ

飲食を断り死せしむに天仏供養を以て日向の説り正しく後人の偽作あると明也

○梶原源太景季が生田の合戦は腹の梅事世小名高し然まども是は櫻の事といふ

説りり兩段の事と是とせん哉引書とある著と

長門本平家物語云梶原源太が時旗を指す母衣を引時旗を巻て母衣

を脱度々替々戦たり武藝の道勇々しく見へる中小艶しき夏は竹岡ある梅

のまゝ盛つる一枝折くは腹は指具の敵の中へ駈入る戦ふ時梅は風が吹れ

る颯と散りれば敵も味方も是を見り感づる所城内より齡せらるる男の

褐衣の直垂は洗革の曹着る馬を乗はり服は挟んで進出申るる水三位中将

殿の御使は梅をさめめいといふ申せしむ

あらあくも見ゆあう南橋將 源太馬より飛きて暫御返申は逆

つひどり取ん為りありへむとぞ申すりたる云々

同真字本云 文安四年写本 井辻氏藏 此源太者乍云同武士有于内情有于外色

之男子好合戦庭而斯夏二月上旬之頃也初櫻一枝手折着履戦懸時颯散

復引時颯散甲鉢鍱之左右袖上散登有情無情皆人附目見 連歌キ

按ざるは長門本は櫻狩のやあるを前条は梅といふ流布の説はすは後人

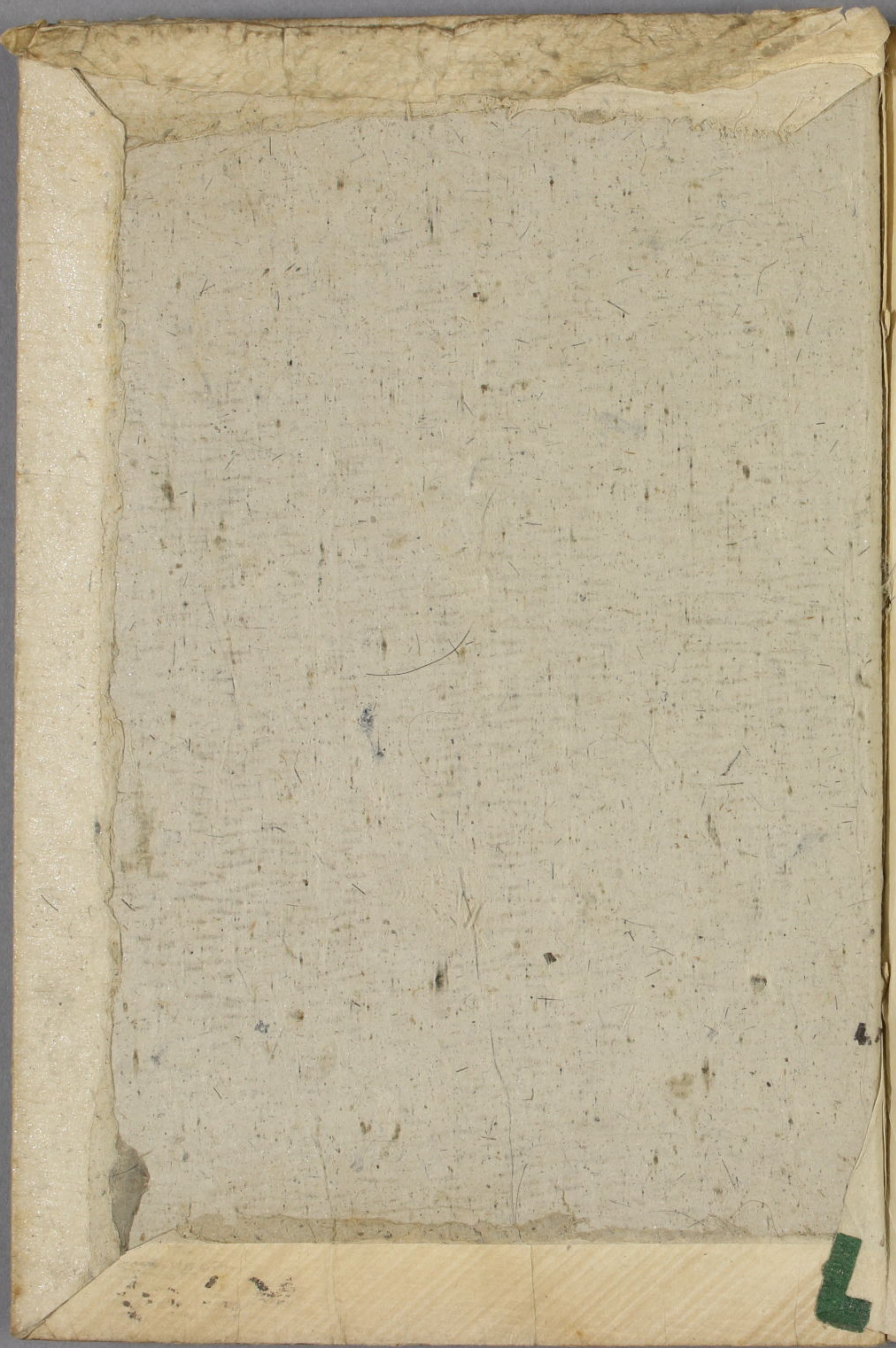
撰又改めしうされど二月七日はまゝ盛つるといふ詞梅ありしうりす風が吹れて

颯と散る襟と覚やうや所詮真字本の詞よりて櫻と定むる考べし

兼葭堂雜録卷之壹終

Vertical columns of handwritten Japanese text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is arranged in approximately 15 columns, reading from right to left.

Handwritten characters at the bottom right corner of the page, possibly a signature or page number.



A small green mark or stamp at the bottom center of the page, possibly a library or collection identifier.

